南稜テラスに行くのはやめて引き返すことにする。もう少し落石が遅ければ，直撃されていたかもしれず，冷汗をかく。昼食後，昨日より急な斜面で雪訓を行う。下りのキックステップでは，新人が全員すべり降ちる。コンティニュアスは飛ばされる者が続出し，本番では恐ろしくて使えない。

5／1　晴

発6：20～シンセンのコル8：20～第二岩峰10：40～第一岩峰12：30～12：50オキの耳13：30～ガレ沢の頭14：35～15：20マチガ沢出合15：50～16：10帰幕

一ノ沢の雪の上には，はぎ落とされた土や草がいっぱいで，雪崩のすごさを示している。登るに従い，傾斜が増し，時々ステップを切らなければならなくなる。下の方でアイゼンをつけていたパーティーが追い抜いていくが，座る場所もなく，そのまま登るしかない。2時間1Pで，たっぷりとキックステップの練習をする。シンセンのコルからは，岩場も雪稜もあり，春の日を浴びながら尾根歩きを存分に楽しむ。下降は，マチガ沢一ノ沢をグリセードで下る。

（松本記）

〔77・6〕　燕～常念～蝶ケ岳

参加者：宮崎，入戸野，菊谷，粂原

6／3　晴時々曇

有明7：55～中房温泉8：50～合戦小屋12：10～燕山荘14：20

遠く山肌を色どる朝もやの快い感触の中で久々の肩の重みに心震わせつつ，この有明の町に降り立った私達4人の姿が，今，朝日の輝く北アの山脈に吸い込まれようとしている。心はずむ元気な笑い声もしだいにとぎれ，無情なほどの登りの連続に，半年のブランクの大きさと体力の減退とを痛感せずにはいられない。6Pに渡る初日の登りの行程は，おだやかな空の青さとは対照的に私の呼吸をかき乱す。森林地帯をやっとの思いで這い出して残るはもうあと1ピッチ。ザラザラすべる土質に四苦八苦しながらも，予定通り，燕山荘へと無事到着。このまま大天井越えを強行しようという意見も飛び出すほどの澄みきった青空。太陽の光を体全体で受けとめ，我が身の軽さに感激しつつ燕ピストンのその後は，待ちに待ってたサパータイム。得体の知れぬ乾燥玉子でのかつどんも，また趣深き味だった。あすの晴天を夢みながら7：45就寝。

6／4　快晴

発5：30～大天井8：50～常念乗越12：45～常念15：40～幕17：30

半年ぶりの山の朝。笑顔の朝日との再会に3人の顔もまぶしく輝く。青・白・緑のみごとなコントラストーまさに絵にも書けない美しさ！　稜線歩きを充分に満喫し，なかなか快調な前進が続けられる。あまりにもの景色のすばらしさに，ついつい腰が重くなってしまった大天井，

常念乗越。たっぷり大休止をとった後，目の前に高々とそびえ立つ常念岳へと足を向ける。3：40山頂着。だが，そうのんびりもしていられない。ランチタイムのとりすぎを今になって後悔しつつ，ひたすら先を急ぐ。すでに陽はかげり始め，なかなか適地も見つからず不安感が心をおびやかす……精神的にも肉体的にも疲労度を増し，キクと私は少々バテ気味……。5：30，ようやく幕営可能地発見！　その時の喜びと安心感……まるで天にも登る気持だった――。

反省その1	：景色に酔うのもほどほどに……！

6／5　快晴

発7：40～蝶9：53～長屏13：13～徳沢15：20～上高地18：20

3日連続超快晴！　4人4様口々に自分の心がけのよさを主張する。太陽の存在をこんなにも間近に感じたことは何年ぶりのことだろう。真赤に日焼けした顔で蝶ケ岳めざし，7：40出発。目の裏にしみこむほどの槍・穂高。感嘆のため息のつき通し。雪の感触もたっぷり味わえ，申し分なしのこの3日間――360度視界バッチリの大展望台・蝶ケ岳山頂を名残り惜しみながらも後にして，私達の不得意科目とする急斜面下りもなんとか乗り切り，3：20，無事地上へと舞い戻ってくることができた。徳沢園の緑に包まれながら，互いの無事と，今回の山行の大成功を喜びつつ，固い固い握手を交わし合ったその姿は，まるでどこかの映画のラストシーンでもかいま見ているような「たくましさ」を秘めているものであった……？

（粂原）

〔77・7〕　夏山合宿　北ア　双六谷～黒部川上ノ廊下～涸沢定着

参加者：森下，中尾，遠藤彰，松本，世利，伊東，遠藤信行，青谷，中野，山野夫妻

双六谷遡行　黒部川上ノ廊下下降

参加者：中尾，遠藤彰，松本，世利（双六谷のみ），伊東，遠藤信行，青谷，中野

7／26　晴

発7：25～小倉谷出合10：30～遡行開始11：30～幕営地17：15

神岡についてみると，車は営林署か何かの都合で広河原まで入れず，車の立派に通れる道を2時間半歩かされる。入山届によれば，双六谷へは一日1パーティーの割合で入っているようだ。笠へ向かう道の吊橋を渡った所で川へおり，遡行を始める。すぐに徒渉，高巻きを繰り返す。高巻きは踏み跡らしきものもあり，すぐ沢におりたつことができるのはありがたい。右岸に幕営。

7／27　晴

発6：15～打込谷出合10：15～センズ谷出合15：50～泊場16：45

高巻きから始まり，沢に降りるとすぐに胸までの徒渉。太陽はまだ谷の中まではさしこまず，

寒い。続くゴルジュの左岸をへつってみたが，抜ける所で時間をくいそうなので戻って高巻く。打込谷からは，左右に岩壁が表われる。大きな岩の下をくぐったりして進む。左岸に落ち込むスラブには２００メートルを越すものもある。幕営後，青谷が用意してきた竿で釣りに出かけるが，収穫はゼロ。楽しみにしていた，イワナには今年もありつけない。

7／28　晴

発6：30～広河原7：00～9：10キンチヂミ～蓮華谷出合10：55～高捲き開始14：00～18：10黒部五郎小屋

キンチヂミは左岸の水ぎわのバンドをへつり，ザックを引きずり上げてこす。徒渉を繰り返していると左から本流と同じ程度の沢が流れこみ，蓮華谷はまだ先だと思っていた我々を驚かす。沢の中の距離感はあてにならない。蓮華谷は，上流に滝を連ねており，おもしろそうだ。九郎右衛門谷への高巻きの入口を，ガイドブックの出合から２００メートルという言葉にだまされ，一時間程さがす。上流に行き過ぎると，上部に岩壁が出て来て行けず，ようやく出合から一本目の滝の落口に落ちてくるガリーがルートであることを発見する。九郎右衛門谷は小さな滝を快適にこえ，かなりバテた頃に，五郎の小屋に飛び出す。

7／29　晴

発7：15～鷲羽岳11：00～高天原温泉16：00～18：55岩苔小谷～20：00泊場

太郎から下る世利と別れて，三蓮の巻き道を行く。鷲羽もまこうという案もでたが，縦走中頂上を一つも踏まないのはおかしいと，鷲羽は越えて行く。高天原の温泉につかっている人を横目でにらみ，先を急ぐ。途中，小遠さんが倒れたり，沢に出て靴を濡らすまいと右岸をへつったりして，時間をくい，幕営地はどうにか見つけたが，真暗の中を裸足で徒渉するはめとなる。

7／30　晴

発8：45～立石8：55～12：15金作谷出合(L)13：10～スゴ谷出合14：25～口元ノタル沢17：50

笛の合図を決め，少し緊張気味に出発するが，以外とスムーズに進むことができる。対岸の水面から2ｍぐらいのところで，色が変わっており，多い時の水量を示している。あんなに水があっては，もちろん沢に入ることはできない。金作谷出合の前で，遡行してくる数パーティーに会い，聞いてみると，何と今朝東沢を出てきたという。ここしばらく，ほとんど雨が降っていないため，水量が極端に少ないらしい。上の黒ビンガも下に河原が広がっていては迫力もなく，自然湖もただの広々とした河原になっている。川も，これでは申しわけがないと思ったか，口元のタル沢出合の手前の廊下で，最後に2回泳がしてくれる。

7／30　晴

発10：30～奥黒部ヒュッテ14：00

もう悪場はない。ゆっくり寝坊をし，釣り人や，ハイカーも見える沢を下る。

8／1　晴

発4：15～5：45平の渡し6：40～10：10黒四ダム駅

予定より2日も早く降りてきたので，針ノ木へ登るという案も出たが，故障者も多いので，早く下に降り，涸沢へ入ることにする。黒部湖のまわりをひたすら歩いて，人のいっぱいいる黒四ダムへ向かう。　（松本記）

〔77・8〕　滝谷第四尾根ツルム正面壁

参加者：森下，松本

8／7

ツルム取付11：10～ツルムの頭14：10～四尾根終了点16：00

ツルムの正面壁よりC沢右股奥壁をつなげてやろうと意気高く南稜のテント場を出発した。スノーコルにてアンザイレンし，コンテでしばらくいくと脆い岩場につきあたるが，ここで先行パーティーのため2時間近く待たされる羽目になり，先が思いやられる。登り始めると天気は良いし日を浴びて体軽やかに動け気分がよい。Cカンテ下のコルより20mのアプザイレンで取付につく。正面壁にはルートが2つ見え最初まようが左のルートを行く。1P目は右上に25m行く。2P目はぐらぐら動く岩の上を右にトライバースし，小さいオーバハングを越えきれいなフェースを人工でゆく。次のピッチはフリーで右上に右岸稜に出る。4P目はバンドを左にトラバースして行くのだが，2つあるバンドの上の方を行く。わき目に滝谷の本流が臨めかなり高度感がある。さらに1P人工でゆくとツルムの頂上に出た。時間的に継続は無理だと2人で決めつけて，ゆっくり昼飯を食べるがまわりの汚さには驚くと言うより，寂しくなってしまう。4尾根のパーティーが登り終るのを待ってDカンテに取付く。縦走者が奥壁の方へバラバラ石を落とすのを見て松本は行かなくてよかったと言ったが，自分の気持は，幾分あきらめきれないものがあった。南稜へ急ぎテントをしまい新人の待つ涸沢へおりた。

ツルムの正面壁は，短いがフリー人工を交えた好ルートだと思う。四尾根との継続というつもりで行った方がよいと思う。　（森下記）

滝谷第二尾根P2フランケ～ジェードルルート

参加者：中尾，遠藤彰

8／7

取り付き8：40～終了12：00

ジェードルルートは，早大ルートの取り付きから20mぐらいのアップザイレンでその核心部である5級のかぶりぎみのフェースの下に出るが，我々は下部の3ピッチを省かずにやろうということで，クラック，第1尾根へつづくバンドを過ぎ，さらにB沢を下っていった。しか

し，取り付き点がはっきりわからず（ここまで下るとＰ２がまったく見えなくなるため）どこでも登れそうであったので，方向だけをたよりに適当にルートを取って行った。結局やや左よりに出てしまったが簡単なトラバースで核心部の下に出た。ここから下を見ると広い凹角フェースがはっきりあり，我々の取ったルートは取り付き点はよかったのだが，すぐ左上してしまわずにほぼまっすぐ登って行けばよいことがわかった。しかし，この広い凹角フェースは見るからにやさしそうで，結局下部の３ピッチは省いてしまってもよいであろう。またさらに，Ｐ２側壁からアップザイレンなしに容易に回り込めることもわかった。

いよいよ核心部である。初めの５級フェースは，ホールド，スタンスのこまかいややかぶりぎみの垂壁であったが，それほど困難ではなかった。しかし，続くオーバーハングした凹角でのフリークライミングでは，ハング上の大きな浮石に出会ったこともあって，かなり緊張し，さらに次のジェードルでは，非常に不安定な姿勢からバックアンドフットへ移ることをしいられ一番時間を要した所である。最後のピッチは快適に越えられＰ２の頭に出た。所用時間は３時間２０分と短かったが，内容の濃い登攀であったと思う。しかし，初めは５級ピッチが３，４ピッチあることから，このルートを登ることをためらっていたが，実際やり終えてみると５級のピッチでもほんとうにむずかしい所は，１か所か２か所しかないことがわかった。

（中尾記）

前穂四峰正面壁北条・新村ルート

参加者：中尾，遠藤彰

8／１１　晴

発５：２０～五・六のコル６：１５～取付９：２０～終了１１：５５

三・四のコル経由の森下さん達と別れ，中尾と二人で五・六のコルを越え奥又白本谷へ下る。滝谷とは異なり，陽あたりの良い奥又白谷には花も咲いていて気分がいい。二人とも奥又白は初めてなので，いざ本谷へ着いたのはいいが，どれが四峰やらわからない。ときどき立ち止まっては岩壁とにらめっこ。本谷を登るうちに概念もつかめて，Ｃ沢をつめてゆく。テラス状のところがあったので，これがＴ１だと思って少し左上してから直上したが，なんだか様子がおかしい。そろそろアンザイレンの必要を感じ始めた頃，小レッジに着く。仰ぎ見れば，どうやら松高ハング，下を見おろせば，明らかにＴ１が。つまり松高ルートの３Ｐ目あたりにいることになる。シマッタと思ったが，北条，新村ルートへトランバースができそうなのでここでアンザイレンする。残置のピトンも結構あり，間違えるのは僕達だけではないと，ホッとする。１Ｐで北条・新村ルートに移り，次のピッチでハイマツテラスに着く。初登攀者がピトン１本で乗越したというオーバーハングは遠藤がトップで取付いた。最初の小ハングは割とすんなり越えたが，次の大ハングがなかなか登れない。右寄りに小さなクラックの入った簡単そうなルートもあり，先行パーティーはそちらを登ったようだったが，初登者がピトンなしで越えたと

いうこの大ハング，今は残置ピトンだらけでなのであるからどうせなら難しい方を登りたい。延々１時間，３度目のチャレンジでやっと乗越す。中尾は１５分足らずで登って来たが，自分の技術の低さと，先縦者の偉大さをつくづくと思う。右へトラバースしてカンテぞいに登る。スッパリと切れ落ちたこのピッチも，高度感があり素晴らしい。後は傾斜もゆるくなり登攀を終えた。奥又白の風は爽やかで，明るさも気持がよかったが，今後への技術，精神両面での課題を与えられたように思う。　　（遠藤彰記）

前穂東壁Ｄフェース　田山ルート

参加者：森下，松本

8／11　晴

涸沢発５：２０～三・四のコル７：１５～取り付き９：５０～終了１３：００～帰幕１６：２０

雪よりも氷に近い朝の雪渓をけりこんで，三・四のコルへ。コルからは，三峰側のシュルンドづたいに慎重に下る。雪渓を下れば速いだろうが，堅さと傾斜を考えると下れない。都立大ルートを登るつもりでいたが，２パーティーもいるため，田山ルートに変更し，カラビナのほとんどを忘れるという大チョンボにもめげず，取り付く。１Ｐ目は簡単に右上。２Ｐ目のスラブは，アブミのかけかえにはちょうどいい傾斜で，時々フリーも混じえて快適に登る。しかし，我々にも不必要なハーケンがベタ打ちになっているのには，いささか興ざめする。次が核心部だ。外傾したレッジでの確保に疲れてきた頃，やっと解除の声がかかる。少し登り，シュリンゲにつかまりながらリッペを回りこむ。アブミで三段降りるのだが，二つ目のアングルハーケンがぐらぐら動き，体重はどうにかささえてくれたが，まったくいい気持はしない。そこから，右へ右へとアブミをかけかえていくが，上がかぶっていて動きにくい。テラスからは４０ｍいっぱいにのばして終了。４Ｐと短かかったが，初めての奥又白としては申し分ない。下りは，森下さんの強い主張で，奥穂をまわりザイテングラードを下る。　　（松本記）

屏風岩東壁雲稜ルート

参加者：遠藤彰，松本

8／12　くもり

発６：２０～取付（Ｔ４）９：４５～扇岩テラス１２：１０～終了１６：３５～帰幕２０：５０

憧れの岩壁。屏風岩は僕にとって，まさにそういう存在だった。特に初登攀者，石岡繁雄氏の「屏風岩登攀記」を読み，登山という行為そのものについても考えさせられてから，ますます思いが募った。そして屏風岩には期待を裏切られなかった。

時折小雨もパラつく曇り空の下をＴ４尾根を登る。まず中尾がザイルをドッペルにして登り，１本のザイルに松本，他の１本を森下さんと遠藤が結び３人同時に登る。アプローチとはいえ，この２Ｐは結構歯応えがある。Ｔ４で東稜へ行く森下さん達を見送ってから，遠藤トップで取

付き，つるべで登る。扇岩テラスで東稜を登っている２人を眺めながら昼食をとっていると，隣りの斉稜ルートをスイスイ登ってくるパーティーがあり，そのアブミ技術のうまさに感心する。扇岩テラスからはボルト連打の完全な人工登攀となるが，古いボルトはリングがシュリンゲで代用されているものもいくつかあった。ちょっとこわかったが，トップの松本が大丈夫だったんだからと思い，平然とアブミをかけ替えていった。ここまでくると高度感は相当でてくる。確保地点があまり安定していないので松本には気のどくだったが，そのまま登り続ける。小ハングを２つ越えて直上する。昨日，北条・新村ルートで苦労したおかげで今度は割と楽に越えられた。そのまま直上するルートと右上して東壁ルンゼへ出るルートの分岐に来たが直上するにはザイルが足らず，アブミ上の確保は自信がなかったので右へ行く。東壁ルンゼでやっと落着いて下を見ることができた。足下には視界を遮げる何物もなく，６００ｍ下の横尾谷の樹林がダイレクトに見える。ここまで高くなるとかえって恐怖感もない。この後３Ｐでザイルをしまう。この登攀終了後にすった煙草はたとえようもなくうまかった。７時間近くもかかってしまったが，自分達だけで登れたのは実にうれしかった。　　（遠藤彰記）

屏風岩東稜ルート

参加者：森下，中尾

８／１２　くもり

岩小屋発６：１５～Ｔ２取付９：４５～終了１３：００～屏風の頭１４：４５～帰幕１９：００

このルートはＴ２から頭上のハーケンに導かれ，最後のピッチまで，残置ハーケンをたどって行けばよい。ルートファインデングを特に要する所もなく，また，ピッチの切り方もテラスごとに切ってゆけばよい。グレードも全体を通して典型的なＡ１であり，したがってあまりおもしろ味のあるルートとは言えないが，初めて屏風岩に取りつく我々としては，ゆとりをもって屏風岩の感触を味わうことができた。強いておもしろかった所を上げるとすると，２ピッチ目のフェースを４０ｍいっぱい左上していくＡ１の所であろう。高度感があり，景色がよくまた隣りの雲稜，鵬翔ルートもよく見わたせた。

このルートが終了点から屏風岩の頭まで一番長いわけで，終了点でザイルを回収してしまったが，初めの所にはザイルを出してもよいような危ない所もあったため，登攀が終了したからといって気をゆるめることは危険である。頭からはガレ沢を下ったが，上部は名前の通り非常にガレしているため下に人がいる場合には，特に慎重に下らなければならない。　（中尾記）

〔７７・８〕　甲斐駒ケ岳黄蓮谷右股

参加者：森下，松本

甲斐駒には白い岩と，その上を静かに走る渓流がある。夏合宿前の６月，森下，中尾，遠藤（彰）の３人で黒戸尾根より赤石沢奥壁を狙ったが，黒戸尾根ではフーフー言わされ，奥

壁(中央稜)の肝心な所ではおっこちてしまい，計画は放り出された。この時は左ルンゼも狙っていた。9月何としても左ルンゼを登るべくアプローチとして美学的であるが合理的ではない黄蓮谷右股にとった。赤石沢の本谷より続ければより爽快な山登りができるだろう。

8／28　くもり時々雨

駒ケ岳神社6：00～不動滝9：10～噴水の滝15：05

谷沿いに行くのなら飽くまでも谷を辿って行くべきだという信念に基づいて，尾白川本流を遡り黄蓮谷に入ることにする。生憎雨が降ったり止んだりする天気でどうも気分がさえず，このまま帰ろうかなどという何の面白みもない気のきかない常套句を口にしては，しけた2人の男がわらじをつけている所など何の味もそっけもない。松本は釣具屋から買ってきたというわらじと地下足袋の一体化したえたいの知れない物をはいていた。谷沿いによろしく，大岩の間を危なげに飛び越え，ツルツルのチムニーをバランス悪く力任せに登り，原始の登山を信奉する私があっと驚く堰堤などに出合い，そこに後からわきの道をいったキャンパーたちが悠然と釣りをしているのを見ては馬鹿らしくなって，登山道を行くことにした。朝日の滝から不動の滝までは黒戸尾根側を高く捲くが，幾つかの名所名瀑があり道もしっかりしている。滝の手前にここより登山道は荒れて使えないと標識が立ててあったが，これは使おうと思ったら使えますよと言う事らしい。事実ここよりかなり荒れた道になったが，時間的には谷沿いに行くより数倍速いだろう。鞍掛沢に近い所で登れそうな誘惑的な滝があった。45度弱のツルツルの滝で15ｍぐらいの高さはあるし，何せ水流が強く深い瀞の中では渦が巻いているので若干不安があったが，案の定最後でつまってしまった。松本の手を借り乗越そうとしたが失敗，深い深い瀞の中にドボン。松本の言によると5秒間ぐらい浮いてこなかったそうだ。メカニズムで水を吹き上げている噴水の滝手前にツェルトをはった。

8／29　くもり時々晴

発5：45～坊主ノ滝7：40～二俣9：25～奥千丈ノ滝10：50～奥ノ二俣14：40～岩小屋17：30

一時間弱行くと黄蓮谷出合に着いた。ここより望むと鬱蒼とした黒戸尾根が左手高く，右手には坊主山がこれまた高く見え黄蓮谷はまさしくその間を細く切れ込んでいる感じで，山が非常に大きく感じられる。千丈の滝を越し，坊主の滝は左岸を捲く所を右岸を高く捲きすぎ40ｍのアブザイレンでナメの六丈沢に下り，右岸を捲いていった。左股を程なく入れて，右股は奥千丈の滝を落としている。下段を登り右岸を捲くと瀑流帯となる。一つ一つ登れる滝が続き所々ザイルを出しつつ行く。わらじを通してくる水のジーンとした感触とざらざらした花崗岩の感触が，心にはねかえってくるようだ。まさしくこれは心の洗濯と言うべきだ。眼下に中央線ぞいの町々が点々と見え，それをはさんで八ケ岳も高く見える。ここまで来るとかなり高く登ってきたためか，坊主山の特徴ある山頂もかなり低く見え，かしこまっているようだ。三つの大滝を捲いて行くと，身を没するはい松の海に入ってしまい悪戦苦闘の末，沢に戻り時間も

遅いので巨大な岩の下の穴に泊まる。上向きの上，低いのでひどく窮屈だった。

8／30　晴のちくもり

発7：30～駒ケ岳8：05～八丈の岩小屋9：15

おもしろそうな岩を拾い登って行くと，そこらにわらじがぬぎ捨ててあり頂上も近いと思った。草付を登り，小灌木帯を抜けると急に白い砂地の稜線というより頂上に出た。頂上はそこから10歩あるかなしかだった。ひんやりした朝の空気がとても気持よかった。ほぼ2日間忠実に頂上めざして沢を詰めて来たんだ……。ゆっくりして八丈の岩小屋をめざした。時間が中途半端なため今日は山の上のholidayにした。夕方ひょっこり草むらより3人の男がでてきた。東大のTUSACの連中で赤石沢を途中より捲いて来たそうだ。夜雨が降る。

8／31　くもり時々晴

発9：25～笹ノ平11：30～横午12：55

左ルンゼを登る日だと岩小屋を後にする。バンドより少し登りアンザイレンする。始めより非常に緊張してしまい，濡れた岩のせいもあって1P登った所で考えてしまった。弱きの虫が俄然強くなってきて，核心部は全然上なんだ，こんな所でこんな有様だと先が思いやられると下りる事に決定。臆面もなく早々と引き上げる。どうも弱い人間だと目標を一つにしぼられないと意志が継続しないようだ。TUSACの連中も諦めたようだ。黒戸尾根を抜きつ抜かれつ走り下りる。　(森下記)

〔77・9〕　谷川岳一ノ倉沢，幽ノ沢

参加者：森下，中尾，遠藤彰，松本

衝立岩正面壁雲稜ルート

参加者：森下，中尾

9／23　晴時々くもり

出合4：00～取り付き7：00～終了17：00～帰幕21：00

いよいよ念願の衝立岩にアタックすることになり，取り付くまでかなり緊張していた。かなり早く出たため取り付くのは我々が一番手であった。1ピッチ目は森下がトップでいよいよ登攀開始である。1ピッチ目は順調にいったが，第一ハングを越える2ピッチ目ではトップの私が1時間近く，セカンドの森下も約40分かかった。この第一ハングは40mのピッチ全体がハングしているといった感じで，気の安まる所がなく特にハングを乗り越す所では，残置のボルトが遠くアブミの最上段に乗り上体を思い切り乗り出す感じで非常に不安定で緊張した。このピッチで腕が棒のように張ってしまった。そのためか次のピッチで森下の指がつってしまって，第2ハングの下の所でビッチを切った。ここで，アップザイレンでおりようか，それとも森下の指が直るまで私がトップでいこうかと相談したが，せっかく苦労をして第1ハングを

越えたのにという気持があり，後者の方を取ることにした。第2ハングはそれほどたいしたことはなく，無難に第3ハングの下まで来た。ここで森下の指も少しよくなったということで，彼がトップで第3ハングを越えていった。ハングそのものはたいしたことはなかったが，このあとのフリーの凹角が，岩が外傾し，ぬれていたため，非常に手間どってしまい，我々の後ろのパーティーをそうとう待たせてしまった。ここまでは衝立岩の正面にいて高度感が非常にあったが，ここから終了までの3ピッチは側面にまわり込んだ感じになって，草木が現われ下方の視界をさえぎるようになり高度感をあまり感じなくなった。洞穴までのチムニーは岩が完全にぬれていて，フリーの所であったが1，2回アブミを使ってしまった。洞穴で少し休み最後のハングにアタックした。このハングは15mぐらいで，短いが完全に岩がハングしていて，体がまったく宙に飛び出る感じになり，つかれもあって気分的にいやであったが，ハングでのアブミの使い方に完全に慣れ，そのためかさほど手間どらずに越えられた。そして最後のピッチは楽な3級であるが，落石がちょっと気になった。登攀が終了したと同時に日没となった。何んと10時間もかかってしまい，精も根もつきはてた感じである。下りは北稜を4，5回アップザイレンをしてコップ状スラブにおり立った。帰幕したのは21時になり，テントに待っていた者に心配をかけてしまった。

終わってみてふりかえると非常に充実感があり，今までの3年間の中で最高の登攀でなかろうかと思う。そしてタイプの違ったハングに実際に触れてみて人工登攀での自信みたいなものがもてた。（中尾記）

幽ノ沢中央壁正面フェース

参加者：遠藤彰，松本

9／23　晴，時々くもり

一ノ倉沢出合4：25～取り付き7：10～中央壁の頭12：00～一ノ倉岳13：50～帰幕16：50

昨日は少しでも眠ろうと急行とタクシーを奮発したにもかかわらず，一時間しか眠れなかった。遠藤さんは，前日まで試験でここ2・3日で数時間しか寝ていないと言う。2人とも雪訓以外に幽ノ沢に入るのは初めてで，眠いと感じるわけがないが，目がしょぼしょぼするのはしかたない。

右俣リンネの左のリッジを登り，草付をトラバースして豆腐岩の右上に取り付く。登攀は濡れていていやなトラバースから始まる。2P目，次第に急になるが，快適なフェースでハング帯の下につく。上のハングは苔がついており登れそうもないので，右へトラバースするとハングは小さくなっている。ここを抜け出ようと，三度程試みたが失敗。上にハーケンがないのでアブミも使えない。こうなれば，左の小さいホールドに足をかけ，左に回り込むしかない。外傾している上に濡れており，滑らない自信はまったくなかったが，確保をよく頼んで，どうに

かはい上がる。遠藤さんが簡単に上がってきたのにはいささかがっかりする。この後，１P急な草付を登ると，傾斜の落ちたスラブとなり６Pで終了。一応，一ノ倉岳を往復してから，よく滑べる中芝新道を下る。　　（松本記）

谷川岳一ノ倉沢第三ルンゼ

参加者：遠藤彰，松本

9／24　晴のちくもり

発７：３０～本谷バンド９：４０～F３上１３：１０～国境稜線１５：４５～帰幕１８：２５

F滝は左側を難なく越え，本谷のF１の左のバンドでアン・ザイレンし，第三ルンゼへ入る。F１は右側を簡単にこし，F２は左側を登る。落口付近は垂直で細いが，堅く快適である。F３は僕がトップをする番だが，かぶっていて濡れており，自信がないので，遠藤さんに頼む。ハングは強引にぬけるが，その上の草のはえた垂直のフェースが悪い。トップを頼んでよかったと登りながら思う。それから上は，コンテでどんどん登り，一度，右によりすぎ確保したほかは，難しい所もなく中央壁上部の稜線に出る。ここでザイルをまくが，その上の露岩がすべりやすく，恐ろしかった。　　（松本記）

〔７７・１０〕　谷川岳南面　ヒツゴー沢，タカノスC沢

参加者：松本，伊東，青谷

１０／１　晴

二俣７：１０～F１　７：４５～稜線１１：５０～１２：５トマの耳１２：０５～

帰幕１５：１０

前夜二俣まで入り，谷川南面の手始めとしてヒツゴー沢へ行く。天気は快晴で俎岳がはるかに高く，登高意欲盛ん。オジカ沢と別れてすぐF１に達する。案内書に書かれているほどのこともなく簡単に越える。F２，F３と連続する。難易度を言えばどれも少し物足りないが，とにかく滝は多く，３人それぞれにルートをとって，適当にビビッては楽しんでいく。その快調さにザイルを使う機会もなく，源頭に近づいた。ちょうど夏山の九郎右衛門沢のような趣きであった。草紅葉の中，踏跡をたどって稜線の一角に立つと，万太郎側の斜面は真っ赤で，思わず息をのむ美しさ。これには感激。全く秋そのものであった。頂上で昼寝をしてのんびりしたのち，一般の人の視線の中，３様の姿でいわお新道をかけ下った。　　（青谷記）

１０／２　晴

発５：２５～タカムスB沢出合６：０５～稜線１０：３５～帰幕１４：３５～谷川温泉

１６：４０

夜明けとともに二俣を出て，出合に来ると，俎岳の岩壁が朝日に光っていた。B沢の出合から始まる長大なスラブは，長さも幅も大きく，したがって明るい。白い岩が適度な傾斜をなし

ているので，この上なく快適な遡行が楽しめる。思い思いに登りながら「明るい」ゴルジョをぬぬけるとゴーロ。眼前には緑の草原が広がり，その先に俎岳とスカイライン，昼寝でもしたくなる所だ。帰りの心配さえなければ！と思いながら，息を切らして俎岳の草付にとりかかる。稜線に飛び出すと，谷川岳の西面には，ハッとするほど美しい紅葉が見える。秋の谷川なのだ。ここで昼食。「南面には思いがけないほど美しい≪やさしい≫『谷川』がある」と思いながらも，昼食をパクついていた。（花よりダンゴ？）　　（伊東記）

〔77・10〕　谷川岳一ノ倉沢

参加者：中村，中尾，遠藤彰，松本，伊東

ニルンゼ～滝沢Bルンゼ

参加者：中村，中尾，伊東

10／10　晴，一時雨

今年の一ノ倉沢は，新人が来るといい顔をしなかったので，新人にとっては，テールリッヂの奥へ進むのは初めてだった。この日も雨こそ上がっていたものの，空は曇り，岩はぬれていたので，新人は蛮勇をふるって岩にしがみついていた。「ザッテル越え」と呼ばれる大クラッシックルートも，今はすいている。烏帽子沢奥壁を横目で見ながら，新人を中にはさんで三人パーティーでノロノロ登って行くと，やっと他のパーティーが登ってきた。折しも，ルートはルンゼから離れようとしていた。ハーケンに導かれるように，また互いのパーティーを意識するように登るうちに，ルンゼから離れてしまっていた。トップをこわごわもどしてから，左にトラバースしてルンゼに戻り，1Pでザッテルに出た。残念ながら広河原はガスの中だったが，新人にはそれでも充分だろう。稜線には，泥だらけで出て来たのだから。　（新人＝伊東記）

烏帽子沢奥壁変形チムニールート

参加者：遠藤彰，松本

10／10　晴，一時雨

マチガ沢出合発4：40～取付7：00～終了13：20～オキノ耳16：00～帰幕18：10

朝焼けに映える岩壁群を仰ぎつつ一ノ倉沢をつめる。2日間降り続いた雨で烏帽子沢奥壁は一面が濡れてしまっている。取付はまわりから水が流れ込んでいたので少しためらったが，取付は僕達が一番早かったし，そのうちに岩も乾くと判断して登り始める。ホールドはしっかりしているが，濡れているので登りにくい。3Pで変形チムニーの下に着く。松本がトップで登ったが，チムニー内部も濡れていて悪いのでアブミを出す。遠藤はアブミなしで登っていったが，チムニーを抜ける直前にすべって宙吊りとなってしまった。右へトラバースして正面ルン

ぬ

ゼを登る。中央カンテルートと合流するととたんにクライマーで混雑してくる。ピナクルのあるテラスから直上しようとしたが，上がかぶり気味なためあきらめてノーマルルートへトラバースする。凹角を越してチムニーを抜け，草付から再び凹角を越す。ピナクルのテラスから3Pで烏帽子岩の下のテラスに着いた。烏帽子岩をまわり込み，濡れたルンゼをトラバースし草付に出て登攀を終える。ちょうど登攀具をまとめていると小雨がパラつき出した。一ノ倉尾根を登り，谷川岳肩の小屋から西黒尾根厳剛新道を下ってマチガ沢出合の幕営地へ帰った。3日間もいて，中村正俊さんも来てくれたのに登れたのが1日だけだったのは残念だった。

(遠藤彰記)

〔77・10～11〕 明 星 山

参加者：中尾，遠藤彰，遠藤信行，青谷，中野

先発，後発ともに糸魚川を乗り越し，泊まで行くという珍事をひきおこしたものの，秋深まる明星山へやってきた。駅から見上げるこの山は孤高にそびえ，南面は小滝川へ一気になぎ落ちている。下の河原にいた人が落石で即死などという噂のためか，小さな社に皆で手を合わせて安全祈願。ベースは発電所前を通って川沿いに10分程進んだ河原とした。毎日ここから東壁ルンゼまで20分，転石を伝いながらアタックした。もっと近くにするのであれば南壁対岸の河原だろう。秋にしては異常な暑さではあったが，我々だけの静かな登攀は楽しいものだった。

なお，下降路としては，南壁は我々は使わなかったが中央バンド上部から西面へ下れば，30分程で河原に着く。又，P6頂上からは右ルンゼ上部へ下り，右ルンゼをアブザイレン2度行ってから南稜のコル経由東壁ルンゼへ。P5ドームからは広場を下って東壁ルンゼ大滝付近へ出る。東壁ルンゼは右岸に急ではあるが明瞭な巻き道があるのでこれをとるとよい。墓石稜はややアルバイトだが，頂上を踏んで一般コースを下るのが賢明であろう。明星山は全体的に脆く落石には気をつけたいが，ルートは易から難とさまざまなルートがあり，継続も可能で，南壁正面は一度は登ってみたい壁である。

詳報のないルートをつけ加えておくと，東壁ルンゼは，半日程度の楽しくも手強いルンゼ登攀。東稜は快適なやさしい岩稜で，ともにこて調べとして最適である。 (青谷記)

P5ドーム ルンゼ状壁ルート～墓石稜右稜

参加者：中尾，青谷

10／30

ルンゼ状壁ルート8：30～10：00，墓石稜11：00～12：30，頂上15：30～帰幕19：40

まったくいやになる東壁ルンゼの巻道を大汗して基部に達する。II級ほどの下部はノーザイ

ルで登る。クーロワールらしきものを行くが，ルートファインディングがむずかしく，ピンを見つけては喜ぶ。随一の手ごたえあるスラブのピッチは，やや右側を登ったようだ。テラスに出るとチムニーがルートを指示してくれ，以降つるべで３Ｐほどの南稜の岩稜を経て頭に出た。少休止後，広場から墓石稜右稜をつなげた。今日は遠藤パーティーが東稜に行くはずで，コールもなく心配したが，最終ピッチで互いを認め，まさに西朋が明星山を独占した感じ。以後Ｐ５を得て頂上経由をしたが，季節はずれの暑さと，やぶこぎと，体力不足のためなのかばてばて。懐電１つに星空をながめ，林道での夢を見つつの下山は全く言うことなし。　（青谷記）

Ｐ６南壁　左フェース

参加者：遠藤彰，遠藤信行

１０／３１

発９：３０～取り付き１０：４０～終了１６：５５～右ルンゼ下降～帰幕１９：４５

前日，対岸の林道から，南壁をよく見ておいた。左フェースは，左ルンゼから垂直に立ち上がっている左岩稜の横手に，ひっそりとそのルートを開かれている感があった。取付は左岩稜と同じである。１ピッチ目彰さんトップで登攀開始。真上に登っていく彰さんを目で追ううちに，１０ｍそこそこザイルが延びたあたりで，彰さんは視界から消えた。あとは一人，ザイルをしっかり握りしめながら，「心の問はいかが答えん」といった，山の恵み多き時間が広がるのをじっと見つめるばかりである。ところが，１０分経っても２０分経ってもザイルが一向に延びない。コールしても「待ってろ」の一点ばりで，要領を得ない。３０分以上も待った頃，ようやくザイル解除のコールが飛ぶ。待ちくたびれた僕は，心も軽やかにザイルの後をたどり始める。と，全く以外な一枚岩が，突然行手をさえぎってしまうのである。ここか，と思いながらもどうしようもない感じである。両足を突っ張るように広げながら，ザイルに助けられ，かろうじて抜けると，くたびれきった顔の彰さんが待っていた。どうやらルートを間違えたらしい。もっと右へ回り込むべきだったのだ。僕らは，１ピッチ目，直上しすぎたようだ。しかし，どうやらここは正規のルートの２ピッチ目のようだ。疲れきった２人は煙草を一ぷくしながら，１ピッチ目にしてはや大休止である。

ルートはその後，何の問題もなくただ延々と続いていた。快適に高度をかせぎ，ようやく南壁の頭についた時には，もう日が暮れようとしている頃だった。さて，これから，右ルンゼを下降気味にトラバースして，東壁ルンゼまで行かなくてはならない。ヘッドランプを出している時，稜線に一頭のカモシカが表われ，ものすごい岩雪崩れを右ルンゼに残して去っていった。

ヘッドランプの明かりを頼りに，アップザイレンを３度混じえての右ルンゼの下降は，先程の岩雪崩のあとも生々しく神経を使わされた。ルンゼを横切り，南稜のコルでザイルをしまっていると，はるか下，我らのテントから，ヘッドランプをふってコールしてくれているのが眼にはいった。１つ，２つ，３つ……それは，疲れと，安堵の入り混った僕たち２人への何より

の励ましであった。　　（遠藤信行記）

〔77・12〕　冬山合宿　北　岳

参加者：中尾，遠藤彰，松本，遠藤信行，伊東，青谷，中野

12／26　晴

甲府着3：00，夜叉神7：40～8：10観音経8：20～10：05深沢下降点～10：40河原11：10～11：55L12：20～（アイゼン着13：30）～尾根13：30～16：00幕営

マイクロで夜叉神峠トンネル前まで行く。28日以後なら深沢下降点までマイクロが入るということであった。深沢におり立つとつり橋は，色々な文献通り使用不可能であったが，その下に丸木橋がかけてあり，もしかしたら渡渉しなければと思っていたので安心した。対岸からは林道に出られないということであったが，林道はすぐ近くにあり道もついていた。林道に出てあるき沢橋から登る道よりもこのまま登って行った方が楽だろうと思い，当初の予定通りそのまま登っていった。踏み跡はそれほどはっきりしてなかったが，赤布が付けてあったため道に迷うことはなかった。しかし大変登りがきつく，また雪はまだ少ないがすべるため2ピッチ目でアイゼンを着けた。あるき沢橋からの道との分岐になかなか出ず，4時になっても池山小屋に着かず，日没もまぢかで皆の疲労もかなりあったため，1日目は池山小屋かそれより先まで行きたかったのであるがやむをえず途中で幕営することにした。

12／27　晴

起床4：00～出発7：30～池山小屋8：00－25～城峰11：15－30

幕営12：00

30分も歩くと池山小屋に着いた。このあと1時間半ほど歩くと遠藤信行が，はき気を訴えたためしばらく休みを取ったが，胃液まではき出したためここで大休止を取った。しかし，異状にはき気を訴えこれ以上進めそうにない状態であったため，やむをえず城峰の所でストップすることにした。しかし，その日中はき気が去らず，何も食物を受けつけず，ただのはき気ではないように思われた。

12／28　晴，強風

今日になっても遠藤のはき気がおさまらずさらに，めんぼくないことであるが私が熱を出してしまい他のメンバーにはもうしわけなかったが，停滞することにした。遠藤は前日よりほとんど食物を受けつけず，私の熱もさがらなかったため，あすの朝の状態をみて北岳アタックに予定を変更することにした。

12／29　晴

起床4：30～出発6：15～ボーコン沢頭7：45～八本歯8：40～北岳山頂10：00－11：00～ボーコン沢頭12：35－40～帰幕14：30～就寝20：00

２人の状態がおもわしくなくアタックだけなら可能であろうということで，ここで予定を変更して残念と同時にすまないことであるが，北岳アタックにした。２人の状態は，から身がやっとのところである。北岳山頂までのところで，重荷の場合にザイルを必要とするところとしては，八木歯の所の１か所ぐらいであった。病人の２人もから身のアタックでは何とか他人に迷惑をかけずに戻ることができた。

１２／３０　晴

起床４：３０～出発６：５５～池山小屋７：４５～深沢１０：１０－３５～深沢下降点１１：３５－１２：２０～観音経１３：３０～夜叉神トンネル１３：５５

大変残念であるが北岳山頂を踏んだだけで下山することとなった。下りはあるき沢橋への道を行ったが，急な登りは入山に使った道の方が多く，入山ではこちらの道を使うのが普通であろう。また対岸の林道へは深沢下降点から出るのと鷲ノ住山越えをするのとでは時間的に大差はない。夜叉神峠でマイクロが待っていたため，それに乗って甲府へ向かった。

この冬山を顧みて，松本がカゼをひき急に行くのを取りやめ，私と遠藤が入山して病気にかかり，山行前の健康管理に怠慢があったと思う。私の場合を考えてももう何度も雪山を経験しているということからまったく健康への配慮を怠ってしまっていた。天気がよかったため非常にくやまれる。これまで冬山は天気との戦いであると思っていたが，それも自分の健康が保たれていればこそである。　（中尾記）

〔７８・３〕　春山合宿　北沢峠～仙丈岳～塩見岳～悪沢岳～転付峠

参加者：ＣＬ　遠藤彰，ＳＬ　松本哲郎，伊東顕，青谷知己，世利孝也，中野敏彦

３／２８　雪のち雨

伊那北６：２０～戸台８：００～３Ｐ～１１：０５丹渓山荘(Ｌ)１２：１０～北沢峠１５：００～就寝２０：００

今回の合宿は，西高現役の合宿との関係で南ア南部の予定を北部に変更した。

戸台を出るとき降っていた雪はすぐに雨にかわった。雨は１０時頃にやんだが，丹渓山荘につくころにはまた降り出して，一日中雨だった。丹渓山荘で昼食をとっていると，現役の諸君が下ってきた。予定では明日下山のはずだったが，天気が良くて一日早く下りてきたとのこと。こちらとしては付添で一日つぶさなくてもよくなり大助かりだ。戸台までは心配するような場所もないので，ここで別れることにする。現役に付いて来た松本，青谷にも荷を分けて，北沢峠へ向かった。

３／２９　快晴

起床３：４５～出発６：４５～２Ｐ～９：００四合目９：２５～小仙丈１１：４３～（四合目から４Ｐ）～１４：２５仙丈岳１４：５２～１６：００大仙丈岳～就寝２０：３０

昨日の雨はすっかりやんで快晴となる。北沢峠に定着して仙丈を往復するパーティーがほとんどで，空身でどんどん登って行く彼らを横目にしながら，ゆっくり登る。小仙丈をすぎてから一人がバテてしまい，仙丈岳の山頂に着いた時には他には誰もいなかった。途中すれ違ったパーティーの人は，塩見まで行くといっただけで驚いていたが，ものずきは僕達だけではないようで仙塩尾根にもかすかだがトレースがある。樹林帯まで下るつもりでいたが，時間があまりなかったことと，大仙丈岳の頂上直下に二重稜線にはさまれたてごろな平地があったので幕営する。

3／30　晴

起床4：15～出発7：05～2P～9：00樹林帯でワカン着装9：30～伊那荒倉岳10：20～10：30高望池11：15～2P～13：45横川岳14：13～野呂川乗越14：00～2P～15：45幕営地（2500m付近）～就寝20：45

大仙丈岳の下りは急なうえにガレた岩の上に雪や氷が薄くかぶっているだけで，かなり緊張させられた。樹林帯に入ると雪がくさりかけており，ワカンを付ける。赤布やトレースのあとがあり，意外と歩きやすかった。野呂川乗越をすぎ，間ノ岳が正面に大きく見える木立のまばらなところに幕営する。

3／31　くもり時々晴，のち小雪

起床3：30～出発6：50～3P～10：40三峰岳11：15～12：20熊ノ平小屋13：00～安部荒倉岳13：55～展望台15：45～幕営地16：05～就寝20：45

尾根はだいたい西側を登る。森林限界をすぎ，岩峰帯となるがこれもほとんど右側から登る。一か所かなり急な所があったが幸い木の根や，小灌木をつかみながら登れる。頂上直下は間ノ岳とのコルをめざして左側へまわったが，斜面の傾斜はかなりきつかったのでまわりこんだりせずに直上した方がよかったかもしれない。三峰山頂から三国平までは風がとても強かった。ガスや荒天の時は充分な注意が必要であろう。熊ノ平小屋でアイゼンをワカンにとりかえる。しばらく樹林帯の後稜線に出る。入山前には三峰－塩見岳間にはトレースがあるのではないかと期待していたが，全くなかった。交代でラッセルしながら進む。展望台の少し先のダケカンバの木立の間に幕営。

4／1　快晴

起床3：45～発7：00～新蛇抜山7：10～2P～8：40北荒川岳9：00～2P～北俣岳11：20～12：20塩見岳13：25～2P～権右衛門山14：43～2P～本谷山17：00～幕営地17：08～就寝21：40

夏道がどう通っているかわからなかったが広い稜線づたいに行く。2P目は二本の稜線の間を進む。北荒川岳からは塩見岳の北東面が大きく見える。北俣岳からは尾根の南側をたどり，今合宿3つ目の3000m峰につく。単独行者に山頂で会ったが，仙丈を過ぎてから，下山の日までの間で出会ったのは彼一人だった。三伏峠まで行くつもりであったが，意外に遠く，本

谷山の南斜面に幕営した。

4／2　くもりのち雪

起床4：38～発7：30～8：18三伏峠（青谷・世利下山）8：40～3P～12：00小河内岳12：27～12：50ワカン着装～3P～板屋岳16：30～高山裏避難小屋17:45

天気の悪化が予想されるので，何とか高山裏までがんばることにする。三伏で降りる青谷，世利を見送り，3Pで小河内岳へ。数か所の鞍部は吹きだまりとなりラッセルもきつい。大日影の前のコルで休んだ頃から荒川岳が見えなくなり，小雪まじりとなる。板屋岳までは赤布に従い夏道をだいたい行くが，雪の急斜面のトラバースをしてしまったり，稜線まで相当の距離を直登したりする。時刻も遅くなり，雪も激しくなって来て少々あせりを感じる。板屋岳をすぎるとなだらかな樹林帯はルートが見つけ難い。どこにでも幕営できるが，雪は明日も続くと考えたので高山裏へ急ぐ。避難小屋についたのは夜の帷がおりかけた17時45分。小屋の入口はちょっと埋っていたが掘り出して中に入る。小屋の中に天幕を張ってしまったが，落着いた時にはもうまっ暗だった。

4／3　雪

起床6：30～沈殿決定8：00　就寝22：30

一日中雪。ゴロゴロと寝てくらす。

4／4　晴れ時々くもり

起床8：00　偵察出発14：50～16：55引き返す～帰幕17：45～就寝19：30

天気は良いが，一日半降りつづいた後なので今日も移動しないことにする。遠藤と松本の二人がラッセルをかねて偵察に出る。小屋からのびる屋根は上部が悪そうだし，夏道は沢をつめて行くので論外。結局，沢を渡って前岳へ直接つきあげている尾根を登ることにする。（小屋から見て正面にのびる尾根）

4／5　快晴

起床2：30～発5：25～昨日の引き返し点6：10～沢のトラバース6：50～7：30R7：47～稜線8：35～2P荒川前岳11：30～11：45中岳12：10～12：40悪沢岳とのコルで一橋大のテント発見13：10～14：07悪沢岳14：34～15：40千枚岳15：50～幕営地16：10～就寝20：30

雪のしまっているうちに尾根に取付きたかったので出発を早くする。昨日，腰やひどいときには肩まで埋ってラッセルしたかいがあって昨日引返した場所までは難なくつく。ここからはトップが交代でザックを背負わずにラッセルしていく。案外早く，約3時間で稜線に達した。中岳までは問題なかったが，悪沢の登りにかかる直前，雪崩に埋ったテントを見つける。一橋大のものだった。恐る恐る掘り出すと，靴一足を含めて，四人分の装備が全部残されていたが，イヤなご対面はせずにすんだ。周りをさがすと発煙筒をたいた後があったのでひと安心。翌々日，回収に来た一橋大の人達に会い，事故があり，ヘリで全員脱出したとの事であった。ガイ

ドブックなどには悪沢岳の登りについては書かれているが，千枚岳については別に何もない。ルートは稜線づたいに行くので間違えることはないが，ナイフリッジなうえに岩がガレていて，かなり緊張させられた。

4／6　吹雪

沈殿　起床３：３０　就寝１９：１０

4／7　くもり時々晴，一時晴

起床２：３０～発５：５３～７：３５Ｒ７：５０～マンボー沢の頭８：００～２Ｐ～１２：００二軒小屋１２：３０～２Ｐ～転付峠１４：３５～保利小屋跡１５：２５～２Ｐ～新倉１８：１５～１９：３０

いよいよ下山。風が強く，地吹雪だったが動けないほどではない。だがラッセルはなかなかキツイ。マンボー沢の頭の先でルートを左にとりすぎ，隣りの沢を下ってしまう。早めに気がついたのでトラバースして正しい尾根に出る。１０時半ころ一橋大の回収隊に会う。それから先はトレースがあるので楽だった。雪も少なくなり，立派な二軒小屋についたのが正午。今日中に下山することにしたので，転付峠を目指して再び登り出す。雪がちらついたりしたが，転付峠から１Ｐ，保利小屋あたりからは雪もほとんどなくなり，空も晴れた。途中土砂崩れのため道がなくなっていたりしたが，１７時には広河内の発電所に出，あとは林道をたどり新倉に着いた。

今合宿は，春とはいえあまり人の入らない仙塩尾根から悪沢へと計１１日間のうちほとんど人に会わず，トレースも少なく，なかなか充実したものだった。特に松本君は現役の合宿に続いて１５日間入山していたが疲れもみせずサブリーダーとして頑張ってくれた。　（遠藤彰記）

１９７８年度

〔７８・５〕　穂高岳下又白谷下部菱形岩壁

参加者：森下，中尾，遠藤信行

5／3　晴

我々はこれまでたびたび己の力を越えると思われる岩壁に，直接この手で触れたい一心から挑んできた。

朝５時頃，徳沢園を出て下又白谷へ向かった。朝日に輝く菱形岩壁を眺めながらきょう１日の行程に思いをはせていた。３時間ほどでＦ１に着いた。まわりはブロックだらけで，上方に注意を払いながら休息を取っていると，Ｆ２の方からかなりの規模のなだれが我々をおそってきた。ここに長居は無用ということで，遠藤と分かれ２人で先に進んだ。Ｆ２から菱形ルンゼに入る所は２，３ｍほどの幅しかなく，なだれが起きないようにと祈りながら，足早にルンゼをつめていった。小さななだれはたびたび起こった。Ｆ１から１時間半ほどで急なルンゼをつ

め菱形岩壁の下に着いた。安全な所で身じたくをしていると，岩壁の上から３０cmぐらいの大きさのブロックがヒューという音とともに降ってきた。さらにルンゼ上方からかなり大きななだれも起こった。身の危険を感じ，さっそく岩に取り付くことにした。しかし取り付いたのはいいが，１ピッチ登った所でまったく違った所を登っているのに気がついた。我々の上はハングがおおいかぶさり行く手をさえぎっている。左上方を見ると，４０，５０ｍ離れた所にルート開拓をした時のだろうブランコがぶらさがっていた。我々は４０ｍほどトラバースをしなければならなかった。見た目には，容易に渡れそうであったが実際には岩もその上にのっている草もぬれ，さらに打ち込んだハーケンも容易にぬけてしまうといった最悪の状態である。２人がトラバースを終えるのに２時間以上もかかってしまった。正規のルートにたどりついたのは登りはじめてから４時間近くもたってからである。森下がトップで正規ルートの３ピッチ目，頭上の凹角からスラブへぬけるルートを登りはじめた。しかしこれもまたぬれた岩と草に悩まされ，ピンもほとんどなく，ボルトを打ちながら登るのに１時間以上もかかり，やっとブランコのある所にたどり着いた時はもう４時近くなってしまっていた。ビバークに適した所があまりなかったため，壁にボルトを５，６本打ち込んでアブミに座わって一夜を明かすことにした。衣類を着こみからだにザイルをまきつけおちついた時はもう７時近くになっていた。これから寒くて長い一夜のはじまりである。登っていた時は気が付かなかったが，ルンゼではなだれがたびたび起こっていた。寒さとアブミにまたがっている足のいたさで一睡もできず，３０分間時計を見ずにいるのができないほどであった。月が出て，ゆっくり，ゆっくり動き夜があけた時には思わずうれしくなってしまった。

５／４　晴

互いに疲れはててしまい，さらにボルト，ハーケンの数も全然たらなくなってしまったので，やむをえず下りることにした。しかし，雪がしまっているうちにＦ１まで戻らなければ危険なため，我々は急いで下りることにした。下りるのは速い。１時間ほどでルンゼに降り立ち，Ｆ１まではかけくだり７時頃には着いた。Ｆ１に着いておどろいたのは前日とまったく地形（ブロック状態）が違っていたことである。

昨夜とうって変わった春の暖かい日ざしをあびながら，後ろをふり向き，ふり向き，安ど感と，我々を寄せつけなかった岩壁に対する屈辱感とを感じながら，ぬけがらのような我々はテントへ向かった。　（中尾記）

〔７８・５〕　北岳バットレス

参加者：遠藤彰，松本，青谷，中野　（後発）山野，桑原，岡田

夜叉神峠から先は車は入れないと聞き，あきらめて歩く僕らの横を，マイクロバスが通りすぎ，唖然とする。なぜか芦安のタクシー会社だけには通行止めではないらしい。この精神的ショックも加わり，二俣につくころはかなりバテ気味。二俣の右のゆるい斜面に，冬天に夏用の

フライをかけて張る。これは，なかなか好調であった。パーティーによっては，二俣から１５分くらい下の水場の近くに張っているところもある。

岩は，まだ所々雪が残っていて，あまりいい状態とはいえず，初め考えていた継続登攀はできなかったが，一とおりのことはでき満足のいくものである。雪上訓練において，キスリングを背負ってピッケルストップを行い，恐れていたほど邪魔にはならず，止められることがわかったことは大きな収穫であった。　　（松本記）

第四尾根下部ピラミッドフェース

参加者：松本，青谷

５／４　晴

発６：３０～取付８：４５～横断バンド１１：００～終了１６：４０～帰幕１９：４０

十字クラックの左手の凹角より取付く。先行に２パーティーいる。岩はかなり雪が付いており，それが溶け出してかなり状態が悪い。下部は傾斜も緩く３Ｐで横断バンドに達した。４Ｐ目は正規のルートより右手から取り付いたため，小ハングを越えてからピトンを打加えて登るはめとなった。５Ｐ目は核心部。先行パーティーが落ちるのを見ていたので，人工を多用し，ごぼうで強引に登り切った。ここまでかなり時間がかかっていたが，四尾根に逃げず直上することにする。岩がぬれていて右手より取り付くが，人工と微妙なフリーとがミックスしており相当手こずる。青谷はピトンが抜けて振られたが事なきを得た。ここを抜けると容易なピッチで四尾根に出た。時間的にも遅くなったので継続は断念し，２Ｐ四尾根を懸垂したのち，緩傾斜帯を慎重に横断してＡガリーを下った。　　（青谷記）

〔７８・６〕　谷川岳一ノ倉沢～滝沢右岩稜

参加者：遠藤彰，松本

６／１０　晴

出合５：３０～取り付き６：５０～Ｙ字河原１０：４５～広河原１４：４５～オキノ耳１７：２０～マチガ沢出合１９：３０

滝沢第３スラブを登ろうと，雪渓の割れ目をまわりこんでダイレクトルートの取り付きへ。下部はさっさとすますつもりだったが，２Ｐ目のハングがピンが遠く，なかなか越えられずに時間をくう。このピッチの出だしと，ピナクルへ移る所も悪く，結局下部に４時間近くかかってしまう。衝立岩のパーティーは先程取り付きのあたりにいたのが，もう洞穴のあたりまでいっている。遠藤さんの体調がよくなく，この時間では三スラは無理と，右岩稜にコース変更する。こうなるとこのいい天気も恨めしい。５級ルートはそう簡単に登らせてくれない。右岸稜は，Ｆ３の右前のフェスが２Ｐ少し悪いが，後はほとんどコンテで登る。広河原からは，薄い雪渓に気をくばりつつＢルンゼに入り，最後の草付は右のヤブに逃げて稜線へ。広河原で三ス

ラに取り付くのが見えたパーティーは，我々が頂上に着いたときには，もうドームの頭まできている。後でこのパーティーも，衝立岩のパーティーも，山岳同志会の人とわかったが，それにしてもなんという速さだ。この山行は，つくづく我々の無力さを思いしらされた。（松本記）

〔７８・７〕　夏山合宿　北アルプス　黒薙川柳又谷～剣定着

参加者：森下，中尾，松本，遠藤信行，青谷，中野，宇佐美，岡田

黒薙川柳又谷

参加者：森下，中尾，松本，遠藤，中野，宇佐美

７／２６　晴

北又小屋８：００～二俣１３：３０～幕営地１６：１０

北又小屋から二俣までの道は，地図には出ているが今はほとんど使われていないようで，所によっては沢づたいに行かねばならず，意外と手間取る。黒薙温泉からの道は，バイクも上ってきているようで，こちらの方が楽と思われる。

二俣出発後すぐに，カゴ渡しで右岸に渡る。まもなく徒渉となり，その後２，３度続く。水流が速く緊張させられ，６人と人数が多いためか徒渉に時間をくう。

７／２７　晴

発６：００～広河原８：３０～カシナギ深層谷１１：００～飛龍峡終了点１６：２５～幕営１７：３０

大きく開けた明るい広河原を過ぎると，沢は暗くなり左岸からカシナギ深層谷が連瀑で合流する。その先何度か徒渉というより飛び込みをした。とにかく徒渉では，誰か一人が対岸に渡ることさえできれば，あとはザイルを頼ってどうにかすることができる。魚止の滝などの飛龍峡核心部は右岸を高巻く。カシナギ谷を過ぎ，右岸を高巻こうとしたが結局そこに幕営する。

７／２８　晴にわか雨

発６：３０～柳河原９：２０～ヨモギ谷出合１１：４０～オーレン滝１５：３０～１６：４０～幕営１８：３０

出発早々，冷たい水を目覚めの徒渉する。何度か徒渉した後，谷は開けはじめ柳河原となる。入谷３日目というのに，いまだに谷は大きく左右に開けており，この谷の大きさ，奥深さを感じさせる。谷芯は左右に何度か曲がりくねって，右岸から小滝が連続したヨモギ谷が合流する。

黒い雲が湧き，にわか雨が降り出したら，オーレン滝があらわれた。落差は７ｍ程だが大きな釜をもつ。右壁を残置ハーケンに導かれトラバースして通過する。雨のため沢は，ミルクコーヒー色になり，徒渉しようにも深さがつかめない。滝を通過するとすぐにオーレン谷が左岸から入る。よい幕営地を探しながら進むが，結局暗くなり始めた頃左岸の草と石まじりの小広い台地に張る。暗い中薪を集めて暖をとる。濡れた服を乾かすためにも，毎晩焚火は必要不可

欠だ。

7／29　晴

発6：50～水谷出合8：00～ゼンマイ谷出合9：10～赤男沢アブザイレン14：50

幕営

何回か派手な徒渉を行いながら進むが，谷は依然として河原状の所が多く，そのわりには順調には進まず，多少じれったく思う。高巻いて赤男沢にアブザイレンで下降する際中野のザックの背負いバンドが取れ，上ノ廊下はもうすぐだということで，そこに幕営決定。巨石の階段状の所にテントを張った。

7／30　晴，夜雨

発6：30～上ノ廊下入口6：55～大ナル谷10：15～雪渓13：30～ビバーク18：30

出発後まもなく，谷が行き止まりのようになる。上ノ廊下に到着だ。谷は直角に左に曲がり，おおい被さるような左壁から滝が落ちている。その奥はこれまでと沢の雰囲気は一変し，左右に高い壁が続いており，溯行意欲をかきたてる。しかし今回は小ナル谷をつめ，大ナル谷を下降し，上ノ廊下は巻くのだ。

少し戻り左岸の小さな小ナル谷をつめる。高くつめ過ぎてしまったため，尾根を乗越して大ナル谷へでるまでヤブこぎに苦しむ。大ナル谷の雪渓上から柳又谷の雪渓上へと，途中スラブ上の滝のアブザイレン3回をして下降した。ここから上は大きな雪渓が続いており，さき程までとは全く違う北アらしい景色だ。クラガリ峡は雪の上を通過し，雪のない所は左岸のブッシュをたどった。

雪が消えてくると，ジメジメしたカレ沢になり，小さな羽虫がうるさい。適当な幕営地を探したが見つからず，草の斜面のベッドにビバークする。これが悲劇を生む源となる。

7／31　晴

発7：30～縦走路12：30

前夜の雨と羽虫の中のビバークのため，森下さんの顔が腫れ上がり，別人のようになる。

雪渓やガレをつめ，源流らしいお花畑を登りつめ，旭岳西の縦走路にでた。

ここから，森下・中尾・松本の3人は剣定着のため真砂沢まで縦走，遠藤・中野・宇佐美の3人は買い出しのため猿倉へと下山した。　　(中野記)

源治郎尾根一峰平蔵谷側壁中央ルンゼ～上部成城大ルート

参加者：森下，青谷

8／4　晴

取付7：20～中央バンド9：30～上部取付10：40～一峰14：20～帰幕17：30

今にも降り出しそうな天気の中を天幕から飛び出した。下部上部をつなげると5級ランクに

なるだけに緊張する。中央ルンゼへは平蔵雪渓のラントクルフトをアイゼンをつけ，アンザイレンをして取りつく。F2，F3を越えると難所のF4であるが，左壁をピトンを使って意外に楽に越えることができた。以後チムニー滝が続くが，入りすぎて困ったものの楽に越えていった。そうこうするうちに中央バンドへ飛び出した。怖れていた落石は皆無であった。天気はいつのまにか晴上がり，上部岩壁は白く輝く。少ない水を飲みほして取付く。先行パーティーが迷っているため遅く，あくびなんぞをする。脆い1P目と白い岩を登るとハイマツテラスにつく。先行は名古屋大ルートに入ったらしく，我々は成城大ルートに入る。ブッシュのテラス上の核心部は森下さんにやってもらう。微妙なフリーとトラバースはまさに落ちても不思議はない。ボルト連打の下でピッチを切る。人工をきらって左手のクラック沿いに進んでアブミを数回かけ替えると終了点であった。しかし最後の2Pは，はるか下に剣沢雪渓を望む非常に豪快で面白いピッチであった。I峰を経てIIのコルから長治郎雪渓へ下った。　（青谷記）

チンネ　左下カンテ～左方カンテ

参加者：中尾，遠藤信行

8／4　晴，午後にわか雨

左方ルンゼの入口付近で登攀具を身につけている時だった。ガラガラっとものすごい音が上部，中央チムニールートの方からし，びくっと身がまえる僕の眼に，無数の落石とともに，そこだけ音のなくなったような静けさで，人がすーっと落ちていくのが飛び込んできた。次の瞬間，ヘルメットだけを手にして僕らは駆け出し，落ちた，落ちたと心の中で呟きながら岩陰を捜していた。しばらくして，落石も収まり，中尾さんと顔を合わせていたところ，思い出したように唐突にヘルメットが一つ，カランカランところがってきたのだが，それがとてもやるせない感じだった。

重い気持を駆り立てるようにして急いで取付まで登る。1ピッチ目はノーザイルで難なく登り，2ピッチ目，中尾さんトップで登攀開始。すぐ上のハングを越そうとしている中尾さんを見つめながらも，先程の光景が頭を離れない。ザイルは，3ピッチ，4ピッチと順調に延び登攀そのものは至極快適なものであった。左下カンテルートから左方ルンゼへ入り，さらに中央バンドを右へ回り込むようにして左方カンテルートを捜す。ルート中核心部である2段のハングは容易に見つかり，1ピッチ目遠藤トップで登り始める。カンテの左側から取付き，アブミをところどころ用いながら高度をかせいでいく。20m程登ったところで，カンテの右へ出るのであるが，そこのフリーが少々悪い。おまけにゼルバンにつけておいたアブミがカンテの左側の方の岩角にひっかかってしまい，それを直しに戻らなければならなかった。いつもそうであるが，降りるという行為は非常に神経を使わされるものだ。先程の遭難者達のコールが聞こえてくる。三の窓から救助が来たのだろう。「けがの様子は――，血液型は何ですか――……」いやな時だった。

次のピッチ，２段のハングは見かけよりずっと簡単であったが，ハングを越したあたりから，急に岩が脆くなり，ザイルの延びが多少遅くなる。後は左稜線まですぐである。

ルート中，特に問題となる箇所はなく，岩は全体に堅く，チンネの数多いルートの中でも快適なルートと言えると思われる。　（遠藤信行記）

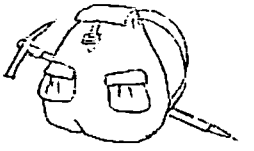
源治郎尾根一峰平蔵谷側壁下部中谷ルート

参加者：松本，遠藤信行

8／7　晴，午後にわか雨

発５：２０～取りつき６：００～終了１８：１０～帰幕２１：００

堅い雪渓をけりこみ，取付へ向かう。上部までつなげれば，剣合宿のフィナーレにふさわしい登攀になるだろう。左へまわりこんで２Ｐ目，赤いシュリンゲの見えている凹角に取り付く。きわどいバランスでやっと登ったにもかかわらず，上はハングでハーケンも打っていない。後続パーティーが，もう一つ左の凹角にルートをみつけたので，直上はあきらめ懸垂で降りる。左の凹角は一見やさしそうだが，ホールドが外傾しており，ほとんど人工で登る。草付を２Ｐで青白ハングの下へ。先行パーティーの残してくれたハーケンを使い，つるつるのスラブを右へ大岩溝へ入る。ここで先行パーティーのトップが，ハーケンがぬけ３０ｍ程落ちる。先日のチンネでの事故が思い出され，一時はどうなるかと思ったが，背中から落ちたことが幸いし，ザックが緩衝材となり事なきをえる。大岩溝を右から左へまわりこむように登る。大きな浮き石が多く，落石でザイルが切断しないか心配だ。ほんの先しか入っていないハーケンがあったが，上の二人はささえることができたのだから抜けないだろうと，こわごわ体重をかける。上のルートを捜していると，がくっと体が動き，「抜ける」と思った瞬間には，１０ｍ下にぶら下がっていた。気を落ちつかせ，左にあった初登時のボルトで２，３本上がったところで，ボルトが抜け，またもとの場所にぶら下がる。今度はザイルにぶら下がったまま，振り子で右の初めのルートへもどる。ハーケンの抜けた所は，左の遠いボルトにやっとのことで乗り移り，テラスへはい上がる。遠藤さんが登ってくる時に激しい夕立が降ってくる。岩場全体がすぐに滝と化す。ちょうど確保地点はハングの下で雨やどりをするが，初めてトップで落ちたショックに，岩がぐしょぬれで泣きたい気持ちだ。小降りになるのを待ち，登り出す。三級程度の岩もやたらと難しく感じる。スラブから灌木帯へ入り，やっと終了。もう，あたりは暗くなりかけている。上部への継続などはとっくの昔に忘れさり，ビバークだけは避けたいと，まっ暗な中を踏み跡をたどって源治郎尾根をひたすら下る。　（松本記）



剣尾根中央ルンゼ

参加者：松本，青谷

8／6　晴

三ノ窓発５：３５～取付８：００～長次郎の頭１２：３０～真砂帰幕１６：１０

夜明けとともに三ノ窓を出発する。今日も快晴である。池ノ平左俣の堅い雪渓からＲ２を登る。１か所やや手応えのあるチムニーを抜けると，狭いコルＢに達する。その反対側に急峻なαルンゼが上がってきている。ザイルを出ししぶったため，かなりやばい思いをしながら中央ルンゼまで下った。中央ルンゼがＦ４の悪相を見せてくい込み，左側は中央壁がみごとに広がっている。ここでザイルを出す。落石のない事を祈りつつ登攀を開始する。容易なＦ４下部の後核心部に至る。濡れた黒々としたチムニーはいかにも悪そうだ。松本トップで取付く。右壁を登り人工を交えてチムニーへ入っていく。ピトンがベタ打ちしてあるので，意外と楽に人工で抜けることができた。その上部はガレ場で，コンテで行く。Ｆ５，Ｆ６以下チムニーが連続し，左右，中央と，時に人工を交えて楽しみながら越えていく。どれもガレ場をはさんで１０ｍ前後でありチョックストーンをかかえている。疲れの出る頃，剣尾根が大分近づいた。最後のチムニーを越えると二手に分かれたが，誤って右側に入ってしまった。小さなルンゼをどんどん登っていくとドーム稜に出てしまい，回り込んだ後，容易な岩場を越えて剣尾根ノ頭に達した。長次郎ノ頭で登攀具をはずし，イワツバメの飛びかう空の下，昼寝としゃれこんだ。中野が下を通るのも知らないありさま。人がごちゃごちゃした頂上は高校時代のあの面かげもなく，カニの横バイも楽なもので，平蔵雪渓をグリセードで滑り下りていった。　（青谷記）

丸山東壁　緑ルート

参加者：森下，松本

8／１０　晴

内蔵ノ助平発４：０５～取付５：３０～中央バンド９：５５～終了１５：００～北峰１７：０５～帰幕１９：０５

懐電をつけて，昨日確かめておいた取り付きへ向かう。１Ｐ目はフリーで，かなり細かいがよく捜せばフリクションもきき，快適に登る。ボルトもかなり打ってあり，初登の時は人工で登ったものと思われる。さらに５Ｐの人工で中央バンド。先日，剣でのっていたボルトが抜けた記憶がまだ生々しく，体重をかけるたびに恐ろしい感じがぬけない。東壁なので暑く，のどがかわく。中央バンドの上のハングは，高度感充分で最高に気分がよいが最後に，細い木の根っこにアブミをかけてのるという，バクチを打たされる。４Ｐ，木登りや人工を混じえると終了点。その後，少し悪い所はあるが，１時間半程で北峰へ。途中北峰で飲もうと思って我慢した１００ccの水が入ったポリタンを落とし，全部飲むんだったと悔むが，後の祭り。北峰から

は，西と北に向かう踏跡があり，我々は北へ向かったが，すぐに踏跡が消えてしまい，懸垂を1回して小沢をおりたが，かなり下のほうに出てしまう。少し，本峰に向かってから，内蔵ノ助平をめざしたほうがよいように思われる。　　（松本記）

〔78・9〕　巻機山　五十沢川下ノ滝沢

参加者：中尾，松本，遠藤信行

9／23　くもりのち雨

五十沢キャンプ場5：45～取水口7：45～下り船10：15～吹上，滝10：55～B.P. 13：00

夜中降っていた雨もどうにかあがり，一晩雨やどりをさせてもらったキャンプ場の車庫からぬけ出す。取水口までは立派な道がついており，東中尾沢などの右岸からの沢やちょっとした壁などが目を楽しませてくれる。不動の滝は，大きな釜を持った立派なものだが，すぐ上流に取水口があり，水量が少ないのが残念だ。取水口からは，今度は右岸を200m程高まいて道はつけられており，所々に鎖場もあり運動靴では結構苦労する。

下り船から本流を少し下降し，下ノ滝沢へ入る。吹上ノ滝からは右岸を高まく，今回は時間もあることだし，直登できるものはなるべく登ろうと思ってきたのだが，ここらの滝はよく磨かれており，直登するにはボルトを連打するしかないようだ。一度，川床に降りるがすぐに行きづまり，今度は左岸を高まく。下部ゴルジュ帯が終れば，後はそう難しい所はなく，沢を充分に楽しみながら進むと，ほとんど傾斜のないナメが広がっている所に出る。どこにでもゴロ寝ができるといった感じだ。時間は少し早いが，上部ゴルジュ帯の入口らしい滝がすぐ上に見えているので，ここで泊ることにする。快適なビバークとなるはずだったが，夜になってまた雨が降り出し，一晩中震えることになる。

9／24　くもりのち晴

発7：15～大滝8：55～巻機山11：35～清水14：20

朝には雨もやみ，すぐ上部ゴルジュ帯を右岸からまく。間もなく大滝が見えてくる。高さは100m弱といったところか。右岸に右上するバンドが何本も走っており，それをうまくたどって落口のあたりに出る。バンドから次のバンドへ移るときは，下が切れているので少し緊張するが，ザイルを出す程のことはない。

大滝の上の50mの滝を登ると，思わず全員歓声を上げる。その先は，かなり上まで広々としたスラブが続いている。これほど横に明るく広けているスラブはそうないだろう。しかも上のほうまで見渡せ，まん中を水が広がったり縮まったりしながら流れている。途中のナメ滝は，ワラジのフリクションの極限ぎりぎりの傾斜で，充分楽しませてくれる。スラブの後には，実にかわいらしいゴルジュがあり，その手前の滝には苦労する。それから先は，いかにも上越らしい源頭であり，やぶこぎもほとんどなく稜線へ出ることができた。　　（松本記）

〔78・10〕　甲斐駒ケ岳赤石沢ダイヤモンドフランケA

参加者：森下，遠藤彰

10／19

韮崎4：30～赤石沢出合10：10～大滝下12：35～八丈バンド下17：10～右岸の岩小屋17：10

小雨まじりの韮崎駅からタクシーで横手の奥まで入る。しばらく歩くうちに月もみえはじめ，雲は相変らず低いが夜は明けてきた。柱と屋根だけに朽ちた廃屋をくぐりぬけて，フィックスされたザイルをたぐったりしながら大武川へ降りる。2Pでひょんぐりの滝の上に出て，更に1Pで赤石沢の出合につく。心配した天気もどうやらもちなおし，摩利支天の頭や赤石沢奥壁が紅葉の美しい沢筋を前景としてガスに見え隠れしている。目指すダイヤモンドフランケAも白い花崗岩のスラブ，黒いオーバーハングの影がくっきり眼に入る。更に2Pで大滝の下に出る。左岸を高まいたが，ここがなかなか急でしかも悪く，木や草をつかんでのブッシュ登りだった。細い木を支点に30mアブザイレンして赤石沢に戻る。15mほどの滑滝を右岸側から登る。コケが生えていて滑べりやすいので空身で登ってザックをひき上げたが，途中岩にひっかかり苦労させられる。八丈バンドの下までたどりついたが，そこにある滝を登らねばならない。日もすでに傾き，滝をどう越えるにしても暗くなるのは必至であるし，右岸の50mほど登った所に岩小屋を見つけたのでそこに泊ることにする。雨は防げそうだが地面が傾いている上に二人が横になるのがやっとだった。ハーケンを打って身やザックなどを止めて眠りにつく。

10／20　晴

発7：00～アンザイレン8：00～白稜ルート取付9：15～断念11：00～八丈バンド岩小屋14：40

岩小屋から眺めて，左岸を登るのが適当と思われたので，ブッシュ混じりの左岸を登る。30分で八丈バンドにつく。スラブを50mほど登ったところにボルトがあり，そこからアンザイレンする。ブッシュ帯を通って3Pで，フランケ基部のバンドに達する。白稜会ルートの取付は岩がはがれてしまったようで，上のピトンに手がとどき難いので，肩車をしてアブミをかける。最初はザックを背負ったまま登りフランケB，さらに上へと継続するつもりであったが，重荷を背負っての人工登攀は無理だとわかり，空身で登ることにする。1P登ってトップが2個のザックを引き上げたが，ユマールを使わず腕力のみで行ったので時間的にも，体力的にも大きなロスとなった。結局セカンドの遠藤が1P目を終了したのが11時になってしまい，このような登り方では非常に消耗するし，いつ登り終わるかも見当がつかないということで，明日空身で登り直すことにした。実力のなさを思い知らされて岩小屋に入る。夕方，カモシカの親子がガラガラ落石をさせながらやって来た。ローソクで暖をとりながら眠る。

１０／２１　晴，のち曇り，一時小雪

発６：４０～白稜ルート取付７：１５～赤蜘蛛ルート終了１５：００

ガスが一面にたちこめていたのでしばらく待機して様子を見てから出発する。空身であるし，下部のスラブはノーザイルで登ったので１５分ほどで取付点につく。昨日同様，森下さんがトップで取付く。３Ｐで赤蜘蛛ルートと合流し，５Ｐ目のジェードルからは赤蜘蛛ルートを登る。幅の広いクラシックに杭のようなピトンが打ちこんであり，ピンの間隔も遠い。例の「落ちるぞ」を連発しながら，森下さんが登り終わった頃から低くたれこめていた雲から，ついに白いものが舞い始めた。風も強く，冷たくなって来て，あられになったり雪になったりしながら降るものに少し気もせかされる。幸い３０分ほどで雪はやみ，残り２Ｐでザイルを解くことができた。終了点から尾根をたどり，八丈バンドを下って岩小屋に戻った。

１０／２２　晴

発７：４５～八丈９：２０～１０：４５五合（Ｌ）１１：１５～駒ケ岳神社１３：５５～横手１４：１５

晴れてしまった。目標の三分の一しか達成できなかったことを悔みながら，昨日がうそのように晴上がった黒戸尾根をのんびりと下った。

赤や黄に粧いをこらした沢をつめて，その奥壁を攀り，静かな頂に立つ。アルペンムードはないが，最も日本的な岩登りの姿の一つではないだろうか。実力不足から継続登攀はできなかったが，それなりに充実した，気持の良い山行であった。　（遠藤彰記）

〔７８・１１〕　越後三山　八海山～中ケ岳～駒ケ岳

参加者：中尾，松本，中野

１１／３　雨のち雪

五日町駅タクシー発５：３５～城内口里宮６：００～（４Ｐ）～千本檜小屋（１１：０５～１２：２０）～幕営１６：４０

エスパースのフレームを忘れ，一度乗った夜行列車をあわてて降り，翌日出直しというのが今回の山行の真相だ。前日から駅に泊まっていたのだが，あいにくの雨。タクシーで城内口に入り，屏風道から八海山をめざす。山里の紅葉と山頂の雪のコントラストを楽しみながら，雨，みぞれ，雪と変わっていくなかを登っていく。雪は３０cm程積もっており，小屋からは冬山完全装備をして出発した。雪が降る中でのクサリ場の登下降は，なかなかシビアだ。クサリ場の横の小さな平地にテントを張る。

１１／４　快晴

発６：４０$^{(3P)}$～オカメノゾキ手前（１０：１５～２５）～（３Ｐ）～御月山（１４：３０～４０）～（２Ｐ）～中ノ岳小屋１６：４５

今日は雲ひとつない快晴。目の前に見える中ノ岳と駒ケ岳めざして稜線を進む。しかし，小

さな登り下りが多く，スネ程度の深さとはいえラッセルしながら進むと，見た目より時間がかかる。オカメノゾキから御月山頂まで５００ｍからの登りにため息をついて登りはじめたところから，中ノ岳からの登山者とすれ違うようになりラッセルからは開放される。

御月山から中ノ岳までは，下ってからもうひと登りだ，やっとの思いで中ノ岳小屋に着くと，丁度日の入り。快晴のため３６０度真赤の大夕焼け。感激しながら立派な中ノ岳小屋に泊まる。

１１／５　晴

発７：１５～（３Ｐ）～駒ケ岳（１０：１０～３０）～小倉山１１：２２～枝折大明神（１２：３０～１３：２０）～新枝折峠１３：４０

今日も天気が良く，春山の気分。雪はまるで苦にならない。前々日の冬山が嘘のようだ。

駒ケ岳から枝折峠１２：３５のバスめざして駆けおりたが，さすがに無理だった。（中野記）

〔７８・１１〕　叶　山

参加者：森下，青谷

１１／２３

新町８：１０～宮地９：５５～ビバーク地１０：２０～牢口ルンゼ１１：００～１３：１５～帰幕１５：０５

森下さんに面白いところがあるといわれ，初めて西上州の山へ出かけてみた。朝一番で起ったにもかかわらず，バス待ちなどで叶山のふもとに着いたのは１０時近かった。登山道に入り四ノ橋の下を泊り場とする。正面にビルディングフェースが圧倒的だ。今日は手始めに牢口ルンゼに向かう。石灰岩に浸食された急なルンゼが，ビルディングフェース左端を裂いている。ツルツルのルンゼに入り込むと，地球儀のようなチョークストーンがはさまっていて，何とも面白い。その下を森下さんが得意のシューズをきかせて抜けていった。少しの人工を交えたり，尻を持ち上げてもらったりで楽しく越えていく。両岸は切り立ち，数ピッチのルートも開拓の余地がありそうだ。困難なフェースを抜けると意外にあっけなく叶後に続く緩斜面へ飛び出した。晩秋の叶後でくつろいだあと紅葉を楽しみながら帰幕した。

１１／２４

ビルディングフェース右稜７：０５～１３：００～以下叶後経て坂本へ（青谷），西上州の山へ縦走（森下）

右稜の取付へは四ノ橋から１５分程で達する。ニルンゼの落ち口がクラックとなって落ち込んでおり，そこが取付である。錆びたハーケンがルートを指示している。青谷トップでチムニー状のところを越え，左にややトラバースすると一担傾斜は弱くなり，ブッシュに入る。結局ここまでがすっきりしている部分であった。露岩をひろって１Ｐを切る。ここから上部はブッシュこぎになった。森下さんは靴のせいもあり草付恐怖症のため，盛んに声と草を落としてくる。４Ｐで左へトラバースするとボルト連打ルートに合流してしまった。右稜は右のカンテを

回り込むらしい。人工を１０ｍぐらい登るとＶ十ぐらいのフェースに出る。ボルト１本打ち足したものの，その先がわからず断念。時間切れもあって下降することにした。右稜はブッシュの稜で部分的に出てくる岩場はかなり悪い。しかしその左に広がる広大なフェースは，充実した岩登りができると思われる。その日のうちに青谷は二子山を経て坂本に下り，森下さんはなお２日間，西上州の山々をさまよったらしい。　　（青谷記）

〔７８・１２〕　冬山合宿　甲斐駒ケ岳

参加者：山野（縦走のみ），遠藤彰，松本，青谷，（後半のみ）森下，中野

鋸岳～甲斐駒ケ岳

１２／２１　快晴

戸台７：４５～角兵衛沢出合１０：１５～大岩小屋１３：３０

雪はまだなく，踏みしめるのは枯葉ばかりで，まるで秋山だ。大岩小屋は，その名から期待していたのだが，大岩壁の基部がハングっているだけのものだ。水はまだ出ていた。

１２／２２　晴のちくもり

発７：００～コル１０：１０～第一高点１０：５０～中岳１３：１０～第二高点１４：５０～中ノ川乗越１５：１５

重荷でのガレ場の登りはまったくいやなものだ。途中から右の雪に逃げて，やっとコルにつく。第一高点では，カモシカが急な斜面を下っていくのを見る。小ギャップへ懸垂でおり，草付の斜面を登るがたいしたことはない。その先，ナイフリッジになった所から左へ降り，風穴へ３０ｍトラバースする。出だしが雪を落とすと，つるつるの岩が出てきて緊張する。風穴の右を登り，中岳で昼食をとる。右へトラバースぎみに下り，３０ｍの懸垂。途中，足場のない所でザイルがからまり動かなくなり大いにあわてる。上から引ぱってもらい，どうにか一段上のスタンスにはい上がり，ザイルをほどく。重荷での懸垂は気をつけなくてはならない。大ギャップからはルンゼを慎重に１００ｍ程下り，かん木帯に入る。第二高点までは，急で腰までのラッセルだ。急なガレ場を下り，中ノ川乗越にテントを張る。

１２／２３　雪

発７：２０～六右小屋１１：１０～駒ケ岳１５：１０～仙水峠１７：１５

今日は，低気圧が迫っており，少しでも早く駒を越えたい。しかし，ラッセルが腰まであり，道もよくわからない。行く手には，駒ケ岳がそびえ立ち，登りはきつそうだ。六合小屋からは雪は少なくなるが，天気は崩れてきた。途中，針金が張ってあるところがあったが，滑るため強引に登ることができず，左のクラックから上がるところが少し悪い。他は悪い所はないが，かなりバテ気味。頂上からは急な下りで，岩場もあり，あまけに正面から風が吹きつけるので，メガネが曇り，緊張する。六方石についた時は，くたくたで駒津峰への登り，仙水峠までの下

りがうんざりするほど，長く感じられた。

12／24　快晴

発11：00～丹渓山荘12：30

〔後発隊〕戸台8：00～丹渓13：30～幕営地17：30

朝早く，山野さんが帰る。空は晴ているが風がやたら強い。テントを仙水峠から下の樹林帯へおろすことにする。移動後，荷上げに丹渓まで下る。

摩利支天南山稜

参加者：遠藤，青谷，松本，中野

12／25　晴

発6：10～水晶沢7：35～南山稜の腰11：20～取りつき12：05～終了16：00

（遠藤，青谷）17：15（松本，中野）～摩利支天17：55～帰幕20：15

森下さんが体調が悪くお休み。4人で中央壁と南山稜をやる予定で出発。朝日に赤く染まる摩利支天を見ていると，登れるだろうかという不安が，登ってやるぞというファイトに変わっていくのが感じられる。水晶沢を渡り，西山稜から南西稜に右へ登っていく。登りすぎたらしく，中央バンドと同じ高さの所に出る。40mの懸垂で中央壁の基部におりるが，アプローチに手間取り，独標ルートの取り付きに着いたのは11時。これではビバークになると，4人全員で南山稜を登ることにする。

腰で昼食をとった後，松本・中野は雪壁に，遠藤・青谷はすぐ左のクラックに取り付く。2P目，僕等は，ショルダーではい上がり，その上の小さな穴をやっとのことでくぐりぬける。青谷は体が半分ぐらいはいるチムニーをかなり苦労して登っている。3P登った所で，遠藤さんが左のフェースを登っているので，僕等は右へまわり込み，ピナクルから，細い枝をたよりにテラスに上がり，カンテ，急な雪面のラッセル，そして15m程のジェードルと登る。ところが，その上は人工になりそうだ。20mぐらい上から遠藤さんが顔を出し，そこが白ザレだという。彼らは，最後のチムニーを敬遠して右へトラバースしたが，そこもかなり悪かったという。日も沈みかけ，風も出てきたが，アイゼンをつけているのと，ピトンがあまりきいていないのとでなかなかはかどらない。かなりあせっていたようで，毛手やカラビナを落としてしまう。やっとのことで白ザレへはい上がり，急いで摩利支天へ向かう。真暗な中で，よく遠藤さんがトラバース道を見つけてくれ，ビバークせずにすんだ。　（松本記）

摩利支天中央壁独標ルート

参加者：森下，青谷

12／26　晴

発4：30～取付7：40～8：30～終了16：00～帰幕19：35

昨日の疲れがまだとれない星空の下，懐電を頼りに昨日のトレースを追い始めていた。南西稜の腰で日の出を迎え，４０ｍの懸垂で摩利支天沢に下り，取付に達した。空は晴れ渡り，壁もすっかり露出している。これは意外に早く登れそうだ。１Ｐ目は青谷トップで登り始める。数ｍの人工の後，バンドからチムニー，クラックと変化に富んだピッチである。高度感はあまりないものの，実に気分がよい。次のピッチは雪のついたバンド状で，慎重に登っていくと長衛バンドに出た。２Ｐほどザイルをひきずりながらラッセルすると上部凹角の取付である。森下さんトップできかないハーケンにアブミをかけていく。森下さんが大きくなった！と思ったら衝撃が来て，こちらも腰を浮かされたものの，数ｍ上で止めることができた。ハーケンが抜けたのだ。ここで敗退してはと，気を取り直して今度はうまく越えていった。途中のレッジで交代し青谷トップとなる。あやしげな人工登攀を続けると，どうしようもない部分に出くわす。ピトンはきかず，やっとホールドを作り出し勇気一番，何とかフリーで越える。セカンドはゴボーで越えてくる。最後のピッチは雪のつまったチムニーを雪を除きながら人工を交えて登り切った。この上部３Ｐでかなり時間を費やし，すでに陽は西に傾き寒風も出てきた。昨日と同じ道を疲れた体にむち打って下っていった。星空の下，明るい流星が印象的であった。好条件下昨日に続いて完登できたことは快挙であり，又幸運でもあった。　　（青谷記）

１２／２７　晴

朝はいい天気だったが，午後から崩れてきそうということで，アタックはみあわせる。結局，半日ずれてしまい，風は強そうだが天気は一日中もち，一日無駄になった。だが，これも安全料と考えれば，仕方ない。

１２／２８　くもりのち雨

発９：００～丹渓山荘１１：３０

東壁と中央壁にもう１パーティー出すことはあきらめ，丹渓へテントをおろす。青谷は帰る。

戸谷川本谷

参加者：森下，遠藤，松本，中野

１２／２９　くもりのち吹雪

発６：００～Ｆ１下７：５０～駒津沢出合１１：３０～Ｆ４下１３：２０～二俣１４：３０～ビバーク地１５：１０

Ｆ１は右のルンゼを簡単にまく。Ｆ２は空身になって右の草付を登るが，けっこう悪い。Ｆ２の下にビバークしていたパーティーは，Ｆ１のまき道まで戻り，Ｆ２もまこうとしていたが，最後のトラバースが悪いらしく，やはりザイルをだしていた。Ｆ３は，下部のなめから右へ移り，そのまま小さくまく。その上の１０ｍの滝は，右からとりつき，中央に移る。氷は５cmぐらいしかなく，ピッケルを打ちこむと割れて中を水がじゃあじゃあ流れているのが見える。その穴をつかんで登るという具合でまったく恐ろしい。続く，２，３の小滝はピオレ・トラクシ

ョンで快適に越える。Ｆ４は，下部は垂直だが，上部は傾斜も少し落ち，登れそうだと左から取りついてみるが，やはり難しそうなのでそのまま左のガリーをまく。二俣から，８ｍの滝を登り，そこから左の尾根に取り付く。少し登った所の平坦地でビバークとする。先程のパーティーは，下の１５ｍの滝をかなり遅くまでかかって直登していた。

１２／３０　晴

発８：５５～三俣１１：０５～六方石ルンゼ１２：２５～六方石１５：１５～帰幕１８：４０

そのまま高まきを続け，尾根が平らになった所から３０ｍの懸垂で沢筋にもどる。この先は，腰までのラッセルが続き，なかなか進まない。もう一晩のビバークはかんべんと，六方石ルンゼをつめることにする。二俣のすぐ上の滝は岩が出ており，ザイルを出すがそれからは５ｍ程の滝を２つ越し，最後の１０ｍ滝は左からまいて樹林帯のラッセルで，稜線に飛びだす。時間がないので頂上はあきらめて下り，祝杯をあげる。

大きな滝は全部まいてしまい，アイスピトンも一本も打たずじまいだったが，氷の感触は充分楽しめた。

１２／３１

発１０：００～戸台１２：０５

下から人が続々と上がってくる。昨日で北沢峠は，１００張り以上のテントが張ってあったから，今夜は超過密だろう。こちらは正月を家で迎えられると喜んでいるのに，山で正月を迎えたいなどと，変った人が大勢いるものだ。　（松本記）

〔７９・２〕　八ケ岳阿弥陀岳　広河原沢第三ルンゼ～北西稜

参加者：松本，青谷

２／１８　晴

八ケ岳農場７：１０～左俣出合１１：１０～三ルンゼ出合１６：００

芽野バス停でひょっこり正俊さんと出くわす。鉱泉へ行くとのこと。やはり山へ行ってるんだなぁとひと安心。八ケ岳農場で別れを告げて我々は広河原沢へ向かう。二ルンゼは西朋でも随分前にやってる様だが，めったに行けぬところでもある。トレースを追って単調な雪道を行く。疲れの出てくる頃，岩小屋で昼飯とする。何とここには昭和１３年の新聞がころがっていた。何ども期待を裏切られながら，三ルンゼ出合にやっと到達した。出合下の岩穴をビバーク地とする。

２／１９　ガス，風強し　午後晴

発６：３５～阿弥陀岳１０：５５～行者小屋１１：５５

ガスで一面真白な中をいよいよ三ルンゼに踏み込んだ。最初からラッセルを続けていくと，眼前に１０ｍほどの氷瀑があらわれた。ここは戸台川で腕ならしした松本が取りつくことにする。ほぼ中央部を意外と楽に越していく。ピオレトラクションは，カッティングや人工を必要

としない画期的な技術だ。一担傾斜が落ちそこでピッチを切る。次の段は傾斜もやや落ち，楽に越えることができた。ここからはまたラッセルの連続でコンテで進む。左岸に落ち込む水瀑を見ながら，左へ左へと進むと傾斜が急になり，大滝に達した。記録ではかなり困難でつりあげを必要としている。だが眼前の大滝はかなりの部分が雪で埋まり，上部数メートルが氷の薄くついた壁として露出している。ここも松本が空身で取りつく。傾斜はかなりきついが，ここの難関を登り切った。あと１Ｐ傾斜の急なところを越え，ダケカンバの上で休んだ。ここから上部はラッセルからルンゼ状を呈し，かすかな踏み跡を追っていく。ややもろそうな岩場を右上すると南稜Ｐ１のトラバース道に出た。しばらくガレ場を登ると阿弥陀頂上であった。こうして１ピバークで三ルンゼを登り切ることが出来たが，もう少し時期が早ければ，ラッセルの少ない氷のルートとしてもっと面白かったであろう。視界のない頂上をあとに行者小屋へかけ下った。この頃やっと雲が切れ快晴となり，日なたぼっこや偵察などして満足感にひたった。

２／２０　快晴無風

発６：１５～取り付き１０：００～摩利支天１２：３５～帰幕１４：１０

昨日偵察しておいた北西稜末端からラッセルを始める。北沢沿いに進み，最初の鎧岩目ざして急な斜面を登る。胸までのラッセルと木登りでやっと北西稜に出る。ここからしばらくラッセルするとダケカンバの稜となり，取付に達する。無風快晴で景色もよく，言うことのない最高のコンディション。北西稜は阿弥陀岳頂上へ鋭く伸び上がっている。最初の４Ｐはナイフエッジが続くが，右側が緩いため難なく通過する。気分も調子も最高なので，１峰は正面から直上する。岩には雪もついていないので素手で登る。次の１Ｐで２峰に達する。ここが核心部だ。正面にシュリンゲが見えるが，予定通り左へトラバースする。ダケカンバのあるところからもろい壁を右上するとハーケンが打ってあり，ここでピッチを切る。セカンドの松本が悪い悪いと言いながらトラバースしてきたので，そこが記録にあるトラバースかとわかった次第。頭上の凹角はハーケンが乱打されている。松本がアイゼンをガリガリいわせながら，ＡＯで越え稜に出て更にザイルを伸ばす。ここをむりやり越えるとあとは２Ｐ程のやさしい稜を残すのみである。意外に早い結末に，右下に道を見ながらわざわざ岩場を選んでいくと，摩利支天に飛び出した。全く楽しい登攀であった。行者小屋ではまた昼寝が待っていた。

２／２１　晴

発４：５０～美濃戸山荘９：００～氷瀑９：５０～１２：２５～美濃戸口１２：３０

天気も下り坂，ツエルトにこれ以上いるのもイヤになったので下山する。途中氷瀑の練習でもと思って早発ちしたが，それらしいものもなく美濃戸山荘でのんびりしていたが，美濃戸口左岸に氷瀑が目にとまり，近づいてみればなかなか大したもの。極限のダブルアックスに腕が疲れるまで練習。バスを遅らせた価値はありました。　　（青谷記）

〔７９・３〕　春山合宿　中央アルプス縦走

参加者：遠藤彰，青谷，中野，岡田，（前半のみ）山野，松本

３／３　　晴

内ノ萱８：５５～９：４０桂小場～１３：３６大樽小屋５５～１５：４５幕営

今年は暖冬で，桂小場からの登山道は雪も少なく，もうすぐ春という感じだった。とはいっても，上を見上げれば将棋頭山の斜面が凍っていて，テカテカに光っている。ラッセルもなく１時間３００ｍのペースで順調に高度をかせぎ，大樽小屋に着く。新しくてきれいな無人小屋だ。そこから２Ｐ．森林限界の手前に幕営する。

３／４　　晴，一時雪

発６：０５～７：００将棋頭山～９：１５駒ケ岳９：５０～１０：２０宝剣山荘１１：００～１５：００極楽平

２０分程で稜線に出ると，目の前に御岳があらわれる。天気がよいので展望がすばらしい。左には屏風絵のような南ア，後方には北ア，行手にはカールをかかえた宝剣，駒ケ岳。３６０度の大パノラマ展望台といったところだ。そんな展望を満喫しながら宝剣山荘まで行く。ザイルの準備をして出発すると雪が降りだした。宝剣岳のせまい頂上（?）を乗り越し，下りに入る。スタカットで何回か進む。コンテにした途端，トップの山野さんがルンゼで滑落。あっと思ったがザイルがピーンと張って停止。山野さんのピッケルストップが決まったのか，セカンドが良かったのか，とにかく無事だった。宝剣越えに３時間程かかり，極楽平のかたい雪面に幕営する。

３／５　　晴

発６：３０～８：５５檜尾岳９：１７～１１：００熊沢岳１１：３８～１３：３０東川岳１３：４５～１４：０５木曾殿越

（山野，松本）三ノ沢岳往復２時間～９：２０ロープウェイ駅

２人と別れ空木岳へと向う。稜線を木曾側をトラバースして進む。急斜面のトラバースが続き，加えて雪がクラストして大変硬いので，ひざの弱い岡田が，熊沢岳をすぎたあたりで足元があやしくなった。東川岳から木曾殿越に下り，空木岳に登り返すのが実に大変なアルバイトのように見え，結局木曾殿越に張る。

３／６　　ガス風強し

発８：３０～１０：４２空木岳～１３：００赤椰岳１３：１０～１４：００南駒ケ岳１４：２０～１５：４５幕営

低気圧通過にともない天気が悪い。多少の回復の見込みを待って出発。空木岳の登りは見た目程，急登ではない。頂上手前付近で，一か所不安定な所があったが，そのまま通過。下りであったら，ザイルが要るだろう。空木岳からの下りでガスのため，道を間違う。ガスが一時的

に晴れた時,左手に大きな尾根を見つけて道に戻る。ガスで展望がまるでない南駒ケ岳からの下りでまたルートファイを強いられる。夜になりガスが晴れて,仙涯領と満月が姿をあらわした。

3／7　快晴

発7：19～8：40仙涯領9：05～9：55越百山10：35～13：05奥念丈岳～14：17念丈岳

仙涯領のクサリ場でザイルを出す。ここを越すとあとは稜線漫歩。よい天気の下，大きく広がった南アをながめながら歩く。越百山を過ぎてからワカンをつける。雪は少ないがくさった雪で重たい。念丈岳へひと登りし，のんびりとする。

3／8　雪のち晴

発8：05～10：00烏帽子岳～11：57鳩打峠12：15～13：30上片相駅

雪がちらつく中を下山する。烏帽子岳のあたりは急な下りだ。鳩打峠に着くと雨は上がって，そこから林道を歩いて駅へと向かった。

行ったことがないという理由で，中央アルプス縦走を行ったわけで，あっけなく終わってしまい，もの足りないという感がある。しかし，天気が良く，快適な縦走であった。（中野記）

〔79・3〕　摩利支天サデの大岩

参加者：森下道夫，中尾伸二

3／21　晴，風強し

まわりの風景は今年の短かった冬を物語っているが，しかし風は強く冷たかった。タクシーで林道の終点まで1時間ほどの所まで入ってもらった。大武川の雪の状態次第で悪くてもきょう中に赤石沢出合まで行くつもりで，明るくなるのを待ってダム建設小屋を出た。林道終点から30分ほどで大武川の川岸に下り立った。日陰の所は岩が凍っていた。互いに注意して先に進み始めた直後，森下が凍った岩に足をすべらせ2mほど下の川の中に落ちて，全身を凍水にぬらしてしまった。着ていたものはみるみるうちに凍っていってしまい，やむをえず小屋に戻ってかわかすことにした。結局その日は小屋泊りになってしまった。

3／22　晴

風もおさまり春を思わせる天気であった。大武川の川岸は雪が少なく進む速度は思ったより速かったが，渡渉には岩が凍っていること水が非常に冷たいことなどで大変手こずった。5時間ほどで赤石沢出合，そこから摩利支天前沢まで1時間半，さらに3時間ほどでサデの大岩の下の岩小屋に着いた。途中難所は赤石沢出合の手前に1か所だけあったが，これもフィックスザイルとアブミが残されていたため無難に通過できた。この岩小屋は出入りには少し不便であったがツェルトが2つ張れるだけの広さがあった。左俣をそのままつめていった雪上にもう1組ビバークしている人がいた。どちらのビバークサイドも第一バンドまで出るには便利である。

3／23　曇

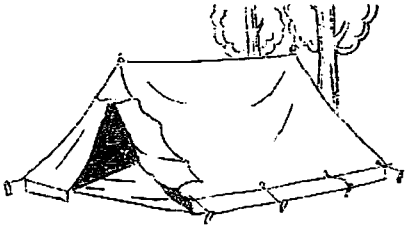
いよいよ登攀日である。

岩小屋から第一バンドまで20分まど，しかし第一バンドも奥へ進むにつれて危険になり我々はＹＣＣルートの取り付き点の手前１ピッチ分ザイルを出してバンドを渡った。１ピッチ目は草付きの垂直に近い階ダン状のフェースである。我々は最初からたいへん手こずってしまった。それというのも荷物が重すぎるため体がどうしても後ろに引かれてしまい，ホールドもあてにならない草をわしづかみにして登るしかなかったからである。２ピッチ目のオーバーハングではトップの私はほとんどから身になって登った。ハングをぬける所がピンが遠くて手こずったが快適な人工登攀が続いた。小さなテラスでアブミ２台，プーリーを使って荷上げをし，ハングの所も足を使えば容易に行えた。３ピッチ目はまた草付きの所で時間がかかった。そして，セカンドで登っていた私がホールドとして使っていたハーケンがぬけてもろに落ちてしまった。さらに４ピッチ目の草付きと，谷川よりもさらに悪い草付きの連続で我々は日程的余裕もないのを考え，第二バンドで下りることにしてしまった。朝７時から登りはじめ第二バンドに着いたのは，１時近かった。第二バンドをトラバースして右稜を登ろうかとも考えたが，第二バンドはバンドとは言えないような所ではいつくばって行くのがやっとのようなバンドである。岩小屋に戻ったのは５時過ぎ。いつもながらみじめな気持で我々の草付きに対する苦手意識がさらに高まってしまった。

3／24　晴

仙水峠で摩利支天にわかれをつげ，戸台へおりた。毎回思うのだが，ビバークを要する登攀においては荷物の軽量化，特に個人装を互いにチェックするほどのきびしさが必要だと思う。

（中尾記）



会　員　名　簿

◎ 特別会員

都筑修一	390 松本市女鳥羽町２－３－６	02634-32-4709
中村　淳	155 世田谷区代沢２－２５－２０	411-1974
	都立桜町高校	700-4330
岩井富士雄	167 杉並区善福寺４－８－１９	394-5714
	エバニュー	
大西千恵子	176 練馬区桜台３－１２	
篠崎　武	190-01 西多摩郡日の出町大久野１７１８	0425-97-0706
	都立西高	
石井　学	167 杉並区善福寺３－１０－１９	390-3937
増田良繁	185 国分寺市光町２－２０－３１	0425-77-2430
	駿台予備校	293-1311

◎ 普通会員

安藤英彌 (1)	190-02 多摩市桜ケ丘１－４２－３	
林　春彦 (2)	133 江戸川区北小岩５－２８－３	657-7555
	日本鋼管京浜製鉄所	
南波貞敏 (2)	185 国分寺市南町２－３－２６	0423-21-2361
	大林組横浜支店	045-201-4131
長崎正躬 (4)	213 川崎市高津区宮崎3-10-13 NHK宮崎台寮123号	044-855-0447
	NHK	
田中将利 (4)	165 中野区大和町３－３２－１	330-2334
	田中金属	330-2151
田中　実 (4)	166 杉並区阿佐谷南１－３－１８	311-6389
	中央電気通信建設株式会社	315-2121
平沢　勇 (4)	070 旭川市忠和四条1-66 北海道東海大学教員住宅6号	0166-61-4083
笹田英次 (4)	164 中野区中央３－１５－１	363-7847
山口雄弘 (4)	180 武蔵野市吉祥寺本町２－１４－２７	
佐藤信治	192 八王子市本郷町８－７	0426-23-5347
	㈱ 甲粋	0426-23-5347

松田朝夫	(4)	565 豊中市新千里西町２－８－４	068-32-5280
町田　明	(4)	167 杉並区下井草４－２０－２０	390-3217
見里朝規	(4)	167 杉並区本天沼３－１６－１	396-5066
渡辺　享	(4)	187 小平市鈴木町１－２５８－２	0423-42-3517
目沢民雄	(4)	386-22 長野県小県郡真田町菅平	02687-4-2018
成瀬泰雄	(5)	113 文京区西片２－８－７	813-2443
加藤鈴夫	(5)	191 日野市平山３－２９－２	0425-91-2149
		キューピー㈱研究所	300-1121
鈴木　潤	(5)	168 在ホンコン（実家）杉並区浜田山３－２０－２	312-2791
林　武志	(6)	180 武蔵野市吉祥寺東町１－１１－７	0422-22-4338
		三星産業	292-1961
川口和雄	(6)	215 川崎市多摩区百合ケ丘１－９－７	044-966-0162
		伊勢丹立川店商品部	0425-25-1111
米野弘躬	(6)	189 東村山市秋津町４－４２－５８	0423-94-7456
		陽成社	269-4611
岩波康之	(6)	124 葛飾区奥戸２－２－１３	696-3721
飯塚康史	(6)	309-01 茨城県北相馬郡藤代町宮和田９７１－２６	02978-3-0944
		日本アイ・ビーエム㈱	583-8698
小田尚於	(6)	309-01 茨城県北相馬郡藤代町宮和田９７１－７	02978-3-0952
		三井建設東関東支店	0472-27-6131
岩崎元子	(6)	227 横浜市緑区奈良町公団住宅奈良北団地４－807	045-962-7763
		関東公安調査局	261-8581
桑田敏子	(6)	246 横浜市瀬谷区二ツ橋町４７５	045-361-5336
稲田弘美	(6)	160 新宿区百人町３－１４－１０１	364-6559
松田　稔	(9)	182 調布市柴崎 2-13-3 つつじケ丘ハイムＢ－６０６	0424-86-5787
黒沢　隆	(10)	在ロサンゼルス（実家）杉並区阿佐谷南 1-40-31	311-7320
		日本鋼管	
橋本鋼太郎	(11)	156 世田谷区野毛１－２１－１３－１０２	702-4321
		建設省	
田中康弘	(11)	275 習志野市津田沼６－１－５－３０４	0474-75-9227
		住友商事　石油製品部	296-2879
沢野　徹	(11)	214 川崎市多摩区宗谷２－１５－７	044-954-7113
関谷興雄	(11)	在ワルシャワ	
		和光交易	

梶　内　俊　夫 (12)　233 横浜市港南区日野町８５６－３　045-845-0643
港南台住宅２０－１０４
東 工 大　726-1111 (内) 2510
川　田　秀　明 (12)　114 北区豊島５－４－１－１０３６　919－8206
フリー・カメラマン
小　川　建　吾 (12)　188 田無市緑町３－３－１５ＢＡ－１　0424-65-6260
東大原子核研究所　0424-61-4131
橋　本　　章 (12)　256 小田原市小竹７３５－２６－４　0465-43-2338
日本曹達　245-6184
野　原　　光 (13)　470-11 愛知県豊明市新田町広長１８－５　0562-93-0293
板　垣　乙未生 (14)　980 仙台市国見３－３－１６　022-33-8706
山　本　省　治 (14)　161 新宿区中落合 4-27-20 大成中井アパート 202　950-8904
大成建設㈱
小　津　亮　介 (14)　257 秦野市南矢名２７３－４　0463-77-5161
平　木　桂　太 (15)　154 世田谷区八幡山 3-29-16 川鉄八幡山アパートB-12　304-3729
川崎製鉄㈱　第一原料部　284-3335
上遠野　　清 (17)　213 川崎市高津区宮崎６－６－５５　044-854-0703
全 日 空　747-5352
梅　原　伸　二 (17)　156 世田谷区船橋７－８－１－８０３　483-5561
大成建設㈱　567-1511
宮　武　義　昭 (18)　316 日立市西成沢１－３３－１　成美寮２０５号
尾　崎　純　理 (18)　164 中野区本町１－３－１２　５０２　373-8187
紀尾井町法律事務所　265-6071
滝　口　道　生 (18)　370-11 群馬県佐波郡玉村町上新田 1446　0270-65-6044
与六団地９３号
三　浦　　潤 (18)　487 春日井市白山町 1855-8 藤山台団地 120 棟　0568-92-3903
㈱アトムズ名古屋店　405号　052-201-2245
山　野　　裕 (19)　182 調布市国領７－１５－１２　0424-85-5704
花王石鹸　開発１部　665-6455
岡　田　　徹 (19)　154 世田谷区弦巻町 1-1-11 第一勧銀弦巻アパート 4-505　424-5935
第一勧銀　586-4651
近　藤　彰　子 (19)　180 武蔵野市吉祥寺東町３－２１－８　0422-22-4731
(高木)
佐久間　令　子 (19)　177 練馬区三原台３－５－１６

杉本方 2-38-17

山本　泉	20	~~165中野区江原3－10－2 ハッピーハウス5号~~	~~953~~-0665
		東京医科歯科大皮膚科	813-6111 (内) 3700
永井祥一	20	164中野区中野4－11－5－103	389-6473
		講談社	945-1111
古城春実	20	063札幌市西丘山の手六条2　山の手合同宿442-41	
(羽柴)			
伊東伸作	21	276千葉県八千代市勝田台3－23－22	0474-83-5718
		三菱商事	210-7020
渡辺喜仁	21	478愛知県知多市八幡字笹廻間12-91大和荘2A	
		新田小学校	0562-34-7009
中村正俊	21	166杉並区成田西3－10－26	311-8647
		三菱銀行　王子支店	911-3921
入戸野まゆみ	21	166杉並区高円寺南2－17－15	312-4920
		~~朝日新聞事業株式会社~~ ワールド・航空	~~214-5832~~
滝口優子	21	180武蔵野市中町3－5－24シ-アイマンション201	0422-54-7487
(山田)		アサヒタウンズ	0425-25-4811
佐々木あや子		503岐阜県大垣市林町10-82-2石川ハイツ501号	0584-74-3202
(宮崎)			
伊東佳子	22	276千葉県八千代市勝田台3－23－22	0474-83-5718
吉田真也	23	360熊谷市新堀新田日立金属和彊寮C－106	0485-32-6207
西井和彦	23	167杉並区善福寺2－1－2	399-4129
		東京歯科大　補綴第III講座	262-3421 (内) 276
中村容子	24	168杉並区久我山3－10－36　渡辺方	334-3824
(渡辺)		高井戸学童クラブ	334-0902
森下道夫	25	176練馬区下石神井2－17－1	997-1056
		大阪電気暖房　東京支社空調部	535-5251
久米祐一郎	25	145大田区北千束1－9－10	717-3361
		早大理工　大頭研	209-3211 (内) 347
中尾伸二	26	153目黒区駒場2－7－16	467-7839
		早大理工　小林寛研	209-3211 (内) 427
遠藤　彰	26	182調布市深大寺町677	0424-83-1365
		東京理科大　広瀬研	0471-24-1501 (内) 376
角田　肇	26	177練馬区石神井台4－1－2－705	920-5240
遠藤信行	27	193八王子市めじろ台3－36－1	0426-64-9352

伊東　顕	(27)	359 所沢市北野７１８－５５	0429-48-8658
松本哲郎	(28)	167 杉並区南荻窪４－１６－１２	332-5924
		早大理工　小林諶三研	209-3211 (内) 352
世利孝也	(28)	167 杉並区今川３－１１－１８　鈴木荘２号室	394-4782
青谷知己	(28)	176 練馬区練馬２－３１－７	992-6393
宇佐美雅己	(28)	192-02 多摩市永山５－６－１	0423-73-6675
中野敏彦	(29)	165 中野区大和町１－６５－２	339-3302
粂原弘子	(29)	102 千代田区隼町１－３　ＲＡ１４１	261-4105
菊谷佳子	(29)	176 練馬区桜台６－１９－９	992-5880
岡田　隆	(30)	202 保谷市下保谷２－９－２７	0423-21-2715
池田達男	(30)	168 杉並区和泉１－６－９	321-6304
福原耕太郎	(30)	273 船橋市行田町１５－４－６－１０１	0474-39-6749
木村享史	(30)	202 保谷市本町６－１５－８	0424-62-9131
井汲重弘	(31)	176 練馬区豊玉中３－１７	991-4990
河合秀樹	(31)	177 練馬区南大泉町３５４	925-5495
藤岡　毅	(31)	177 練馬区大泉学園町８４７	922-7891

↓下宿 0472-45-7078

編　集　後　記

7年前，前18号が出た時は，学生会員がほとんどいなくなり，その後の再出発の記録ということで，19号をお送りします。いささか，古い記録や，記憶が不明瞭なままの記録もありますが，手元に集まりましたものはすべて載せました。

どうにか，冬のバリエーションの入門までこぎつけたといった感じですが，あらためて総覧を見てみると，ガイドブック的山行が多く，西朋カラーがでているとは言えないようです。まあ，これはこれからの課題でしょう。しかし，今年度に入り，中堅の弱層化，新人との意識の上でのギャップなどが深刻化してきており，夏山，冬山合宿も満足にできませんでした。各人のいっそうの努力を望みます。

「西朋」は，学生から社会人への一方的通信の場ではないはずです。多くの投稿をお願いします。

(松本記)

“原稿，原稿”── “編集，編集”── ああ！　早くやらなくちゃ── 早く早く── !!……めざす「西朋」の頂は，いつまでたっても，はるかかなた……。気ばかりあせって，まるで思うように足が上がらなくって……。この「西朋」編集の責務を仰せ付かってからなんと，はや7か月── ！　やっと　やっと，夢にまで見た一冊がこうしてできあがりました。私の力量不足の為，会員の皆様── 特に松本さんには，はかりしれないご迷惑をおかけしてしまった事今，この場を借りて，心からおわび申し上げます。

山を愛し　山にあこがれ　山に挑む真の人間の姿
何の装いも　繕いも　偽りもない　生の山男達の声

真近に迫る仕事の締切りをもいつしか忘れ，何度「西朋」の世界に，ひきづり込まれてしまった事でしょう。一つ一つの山行にそれぞれの想いが深く熱く内在し，まるで人事とは思えない，まさに生きたひとコマひとコマ── 。この感動は永遠のものであると信じます。

「西朋に女子部の存在する事，どうぞ忘れないでください。」

……総会でのきまり文句── 。女子会員不足を叫び続けて3年

この原稿を手にしていると，そんな逆境にもめげず，ただ，とにかく，山に行きたい気持ちで，いたたまれなくなる今日，この頃の　私のありさまです、

(桑原記)

西朋 19号

昭和55年1月25日 発行

編集人 松本哲郎
発行人 平木桂太
発行所 西朋登高会
世田谷区八幡山3－29－16
川鉄八幡山アパート B－12
平木方

印刷 藤堂印刷工芸社
TEL 333・9325